

GSJ コミュニケーションズ

PROCEEDINGS OF THE SOCIETY

巻頭言 **遺伝学との出会いとその後の展開** 志村令郎

大会ニュース3 **日本遺伝学会第77回大会案内**

市民公開講演会、シンポジウムほか企画概要、宿舎の案内

GSJ論壇 **遺伝学は新しい** 小原雄治

GSJサロン

外国人留学生を受入れて
遺伝学と国際交流

河野重行
原島 俊

GSJフォーラム2題

ショウジョウバエ遺伝資源センターの設立と今後 山本雅敏
いま進化遺伝学がおもしろい 澤村京一

【シンポジウムレポート】

ゲノム動態と環境応答

— 品川日出夫教授退職記念シンポジウム開催の報告より — 石野良純

<日本学術会議レポート>

G8サミットに向けた各国学術会議の共同声明 他

遺伝学談話会お知らせ 高畑尚之、田嶋文生

本会
記事

**2005年度第1回日本遺伝学会評議委員会議事要録
遺伝学の教育と普及に関する特別委員会始動**

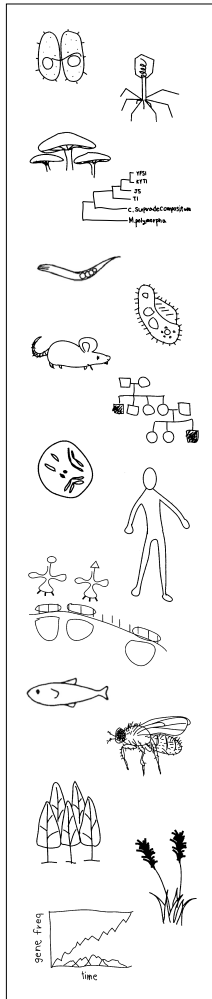
GENETICS SOCIETY OF JAPAN (GSJ)

◆創立1920年◆

日本遺伝学会

目 次 頁

1. 「遺伝談話会」開催のお知らせ 高畑尚之	3
2. 巻頭言 「遺伝学との出会いとその後の展開」 志村令郎	5
3. GSJ 論壇 「遺伝学は新しい」 小原雄治	7
4. GSJ サロン I 「外国人留学生を受入れて」 河野重行	8
GSJ サロン II 「遺伝学と国際交流」 ——ユネスコ国際大学院バイオテクノロジー研修講座の講師として—— 原島 俊	10
5. GSJ フォーラム I 「ショウジョウバエ遺伝資源センターの設立と今後」 山本雅敏	13
GSJ フォーラム II 「いま進化遺伝学がおもしろい」 澤村京一	16
6. 「平成17年度東レ科学技術賞および東レ科学技術研究助成の 候補者推薦要領の概要について」	17
7. シンポジウムレポート 「ゲノム動態と環境応答」 ——品川日出夫教授退職記念シンポジウム開催の報告より—— 石野良純	18
8. 第42回アイソトープ・放射線研究発表会・日程表	20
9. 日本遺伝学会第77回大会案内 大会ニュース（その3） 市民公開講演会／シンポジウムほか企画概要／宿舍の案内	21
10. <日本学術会議レポート>	26
①学術雑誌の電子アーカイブ事業（紹介） 日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会の開催（報告）	
②日本地球惑星科学連合の設立について（記者発表用資料）	
③G8サミットに向けた各国学術会議の共同声明 会長コメント	
④「日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会」提出資料	
⑤日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会（05/06/20）配布資料から	
11. 本会記事	31
・2005年度第1回日本遺伝学会評議委員会議事要録	
・「遺伝学の教育と普及に関する特別委員会」武部委員長から委員候補への手紙	
・会員異動	
・日本遺伝学会大会暦年表	



会長日々 ——憂色の日々に——

GSJに添えて第2号をやっとお手元に、表紙はさくら色、4月号なのである。遺伝学をキーワードに日頃研究教育に研鑽される会友、そして新しく遺伝学コミュニティに参加された人々へと、特別にお願いしご寄稿いただいた巻頭言の志村先生、論壇の小原先生には深甚の謝意を表したい。学問に、そして遺伝学によせるお二人の深い思いが胸に響く。◆季節は移り変わり早くも夏に、さ緑色の6月号編集に入る。◆お気付きかと思うが、冊子なかばにオレンジページの大会ニュースがある。企画は、まだ外形的ではあるが、遺伝学研究所（三島）を中心とした精鋭の準備委員会がこの大会に寄せる格別の熱意に満ち溢れ、現代遺伝学潮流の源流の把握とフロントの先をみつめる確かな眼差しが読み取れる。本冊子末の大会暦年表におもわず、「大会は年輪を重ね、叡智はつとい、新しい遺伝学は芽吹く」とタイトルを付けた。◆大会が終わると、BP賞受賞者が執筆する「若手研究者が語る21世紀の遺伝学」特集の編集となる。今年はシリーズ第4号。どういうメンバーが執筆者となるのか、私は大きな期待をもって待つことになる。バックナンバーを手にする、ボスや友人達と笑顔でならぶ彼等は今いずこに、幸せでいて欲しい。大志を捨てないでと祈る。彼等の行く末を思い、胸が締めつけられる。ときあたかも文科省は院生を増員するという。総合科学技術会議は第3期基本計画で、優れた人材育成を主眼に据え、今後は機関における個人の重視へと視点を移す。さながらトルシエからジーコ型へ。◆しかし日本の研究室は責任分散型が構造的に多く、まして今、責任者は研究員や院生と直接指導の関係をもちにくい状況にある。大学をたずね、友人と語らうときこの苦しみが伝わり、いたたまれない。学会はいかにあるべきか、いまなにをなすべきか、会員の総意を結集したい。（石和）

「遺伝学談話会」 開講のお知らせ

日本遺伝学会将来計画幹事

高 畑 尚 之

1. 主旨と目的

遺伝学は“親から子への”あるいは“世代から世代への”遺伝情報伝達のルールやその物質的基盤を明らかにする学問分野です。そのような観点から考えれば、遺伝情報分子 DNA の二重螺旋構造の解明や遺伝暗号の解読が成し遂げられた時点で、遺伝学は完成したという見方があります。しかし、古典力学と同じように、学問としての重要性や意義が少なくなったわけではありません。事実、今日の遺伝学は生命現象の統一的理解を試みる上で必須の基礎学問となっています。問題は、ポスト・シーケンスという新しい時代における遺伝学研究の重要性、意義あるいは将来像が見えにくくなっていることです。そのため遺伝学自体が低迷している印象を与えています。このことは、次代を担う若い人々が特に顕著に感じているのではないのでしょうか。遺伝学の面白さとは、遺伝学研究の将来的な方向とは、また現代社会の直面する様々な課題の解決に対して遺伝学はどのような貢献ができるか、更には自然と対峙してきた20世紀型の自然観・生命観に新しい視点をもたらすことができるかなど課題はさまざまです。本遺伝学談話会は、遺伝学の教育研究における課題を浮き彫りにし、その解決の方向を議論、模索する場として開催します。受講者と講師の双方向の対話を大切に、活気溢れる学びの場を志します。

2. 概 略

遺伝学談話会では上記の目的を達成するために、現在活躍されている遺伝学者の方に基調講演をいただき、講演後に講師と参加者による自由闊達な意見交換を行います。このような意見交換を有意義なものとするため、談話会は宿泊施設の附随する大学あるいは研究所をお借りして全国規模で開催します。また、談話会は講演会や議論の場を設定するのみならず、新しい時代の遺伝学研究を志す若手研究者や学生からの要望を積極的に取り入れた運営を目指し、オーダーメイドの遺伝学教育を支援します。さらに、講演や意見交換の記録を整理し、学会内のみならず他分野の多くの研究者への情報発信を目指します。

主催は、日本遺伝学会

運営責任者は、日本遺伝学会将来計画幹事 高畑 尚之

開催頻度：隔月

3. 今後の予定

第1回 7月8日(金) 講師(高畑尚之：総研大) 於：総研大葉山キャンパス

第2回 8月19日(金) 講師(田嶋文生：東京大学) 於：総研大葉山キャンパス

以降、城石俊彦(遺伝研)、勝木元也(基生研)、堀田凱樹(情報システム機構)、藤山秋佐夫(情報研)、斎藤成也(遺伝研)、堀内嵩(基生研)、真木壽治(奈良先端大)、小原雄治(遺伝研)、尾本恵市(総研大)、佐藤矩行(京大)、岡田清孝(京大)他の先生方を随時お招きし、お話をいただくことを考えています。また、参加者のリクエストに応じてあらたに講師をお招きすることも可能です。但し現時点では、第3回目以降の講師の方は全く暫定的なものであり、先生方のご了解もいただいていないことをご承知置ください。このこともあって、第1回では高畑が最初の講演を試みますが、そのあと本会開催の主旨や今後の方針についても意見交換をする予定です。

第1回 遺伝学談話会



高畑 尚之氏

日 時：平成17年7月8日(金) 午後3時より
場 所：総合研究大学院大学先導科学研究科棟2階セミナー室
(夕食後の懇談会は総合研究大学院大学共通棟2階談話室)

テーマ1：『基礎集団遺伝学』 高畑 尚之氏

概 要：一世紀に及ぶ集団遺伝学の歴史を振り返りながら、なじみの深いメンデルの遺伝法則やハディー・ワインバーク等の集団遺伝学の基礎的な法則が、ポスト・シークエンスの時代にどのような役割を果たしているのかを事例に基づいて紹介し、集団遺伝学の面白さを語りたい。

講師の紹介：1946年名古屋生まれ。京都大学修士課程のとき確率過程に興味をもち、九州大学博士課程にて理論集団遺伝学の研究に従事。その後、遺伝学研究所集団遺伝部門第2研究室の職員をへて、1992年に総研大教授となる。2000年から副学長、また昨年より理事に就任。総研大では、人類進化の遺伝的基盤に興味をもち、実験グループと共同研究を推進。人類を含め生物の進化は、環境との関係で冗長となった遺伝子の退化によるとする仮説を提案、検証中。

テーマ2：遺伝学談話会的主旨と今後の運営について

参 加 料：無料。参加資格は特に問いませんが、なるべく事前に係までお問い合わせください。

連絡問い合わせ先：総合研究大学院大学先導科学研究科 生命体科学専攻

嵐田葉子 (tel: 046 858 1574; e-mail satta@soken.ac.jp)。

宿泊を希望される方は6月末までに嵐田までお知らせ下さい。大学の宿泊施設の予約を致します。尚大学周辺には簡易に朝食を取れる施設がありませんのでご注意下さい。希望者には国際村センターの朝食(1500円)を予約いたしますので、申し込みの際合わせてご連絡ください。

第2回 遺伝学談話会



田嶋 文生氏

日 時：平成17年8月19日(金) 午後3時より
場 所：総合研究大学院大学先導科学研究科棟2階セミナー室
(夕食後の懇談会は総合研究大学院大学共通棟2階談話室)

テーマ：『集団遺伝学教育の問題点』 田嶋 文生氏

概 要：集団遺伝学は理解するのが困難な分野だといわれている。ひとつには遺伝学の知識だけでなく、数学の素養(高校レベルの数学)も必要なのであろう。とくに遺伝的浮動を理解するには確率の知識が必要である。集団遺伝学をどのように大学生、大学院生に教えたらいのか、講義を担当するたびに試行錯誤している。講義の実例を紹介し、教育の問題点を議論したい。

講師の紹介：1951年福岡県大川市生まれ。九州大学大学院修士課程で実験集団遺伝学を、テキサス大学ヒューストン校博士課程で理論集団遺伝学を学ぶ。国立遺伝学研究所集団遺伝研究部門助手、助教授をへて、1995年東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻教授になる。現在、主としてDNA多型の維持機構に関する理論的研究を行なっている。

参 加 料：無料。参加資格は特に問いませんが、なるべく事前に係までお問い合わせください。

連絡問い合わせ先：総合研究大学院大学先導科学研究科生命体科学専攻

嵐田葉子 (tel: 046 858 1574; e-mail satta@soken.ac.jp)。

参加を希望される方は8月10日までに嵐田までお知らせ下さい。

会場へのアクセス

最 寄 駅：JR 横須賀線 逗子駅

京浜急行線 汐入駅

いずれの駅からもバス(湘南国際村行き)で25分～30分

「湘南国際村つつじが丘」下車

バス停から徒歩5分(左手に見える緑の屋根白い壁の建物です。)

尚いずれの駅からも湘南国際村へ向かうバスの本数は1時間に1本程度です。

バスをご利用の方は、事前にバスの発車時刻を確認されることをおすすめします。

(バスの時刻表はURL: <http://www.soken.ac.jp/japanese%20pages/time.html>)

その他大学への詳しいアクセスについては総研大ホームページ (<http://www.soken.ac.jp>) の葉山キャンパス案内をご参照下さい。

遺伝学との出会いとその後の展開

大学共同機関法人・自然科学研究機構

機構長 志村 令郎



GSJ コミュニケーションズへの寄稿のご依頼を頂いたとき、自分は適任でないのではと少なからず躊躇したが、日本遺伝学会に長年のお世話になったことへのお礼もこめて、私と遺伝学との出会いについて、特に木原 均先生に連なる部分を中心に書いてみることにした。折しも、2004年10月、横浜市において木原 均博士の業績を称える記念碑が建立され、改めて、木原先生の存在の大きさを知るこの頃である。そして私の脳裏に、純粹に学問を模索し悩んでいた若かりし学生時代の自分自身が蘇って来る。

私が遺伝学と出あったのは、極めて偶然な出来事であった。京大教養部時代、どのような分野に進んだらよいか進路決定に迷っていた頃のことである。それまで考えていた分野とは異なっていた

が、たまたま、遺伝学という講義を聴いてみた。その講義は、当時、奈良女子大の教授だった徳永千代子先生のもので、メンデルから始まり当時は未だ斬新だったショウジョウバエの遺伝学までを話された。高校時代に生物学を履修していなかった私には、講義は時に難解だったが、徳永先生がもつカリスマ性と自信に満ちて話されるその遺伝学の話には、非常に強烈かつ不思議な魅力があった。その講義の中にはDNAは登場しなかったが、遺伝子という遺伝現象を説明するのにもっとも有効な遺伝単位を考えるにいたった経緯や、それを証明するための帰納的な議論は、きわめて論理性豊かで実に美しいものであった。大袈裟に言えば、この講義との出会いが、私を遺伝学への道に導いたのであった。私は遺伝学に関する書籍を乱読して勉強した。しかし、勉強するにつれて、遺伝学は最早完成してしまった学問ではないかという素朴な疑問を感じるようになっていた。

1953年ある日、当時、農学部農林生物学教室実験遺伝学講座の教授をされていた木原 均先生を予約もせず突然お訪ねした。大変に不躰な訪問者に対して、木原先生は快く会って下さった。長身で端正なマスクをされた先生は、実に格好がよく、おおいに気後れがしたのであるが、遺伝学に関して斯く斯くの本を読んだこと、そしてその結果、遺伝学の体系は完成しているように思え、最早拓くべき大きな問題は残されていないのではないか、と思ったことなどを申し上げた。それに対して木原先生は「そんなことはありません。遺伝学は、これ

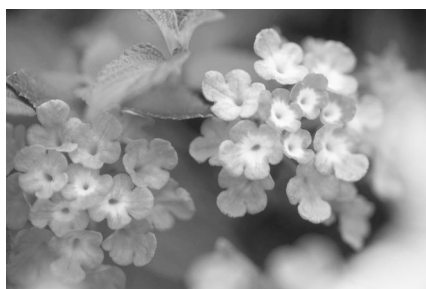
から遺伝子やその働きをモノのレベルでしらべる時代になると思いますよ」と、言われた。さらに、「そのような新しい遺伝学の研究に興味があるのなら、理学部植物学教室生理学講座の芦田譲治教授がよいでしょう」といって下さった。

こうして、大学院入学後も芦田先生の研究室に所属して、研究生生活を開始することになった。修士課程終了後、芦田先生がアメリカへ留学することを勧めて下さり、いくつかの留学先の候補のなかから、たまたま由良 隆氏（現京大名誉教授）が紹介して下さいだったラトガース大学微生物学研究所（現ワックスマン研究所）のボーゲル（H. J. Vogel）教授の研究室に、大学院生として留学することになった。こうして微生物遺伝学を中心にした、当時まさに黎明期にあった分子生物学のなかに身をおくことになった。Ph. D. 取得後、それ以前に行われたあるシンポジウムにおける講演で感銘を受けたネイサンズ（D. Nathans）教授の研究室のポストドクとなり、ジョーンズ・ホプキンス大学医学部で本格的に分子生物学の第一線で研究することになった。こうして、それ以後の私は、分子生物学と呼ばれる分野を歩み続けることになった。アメリカにほぼ10年滞在後に帰国してからも、引き続き京大理学部生物物理学教室において、この分野の研究と教育に従事した。

振り返ってみれば、大学の教養部時代に木原先生のもとをお訪ねしたとき、先生から示された「遺伝子やその働きをモノのレベルでしらべる」ということに、私の研究者としての原点があったと思っている。木原先生にとっては、そんな学生が教授室に訪ねて来たことも、私のことも、おそらくすぐにお忘れになった出来事に違いない。木原先生の門下には沢山の逸材が輩出しているが、私はその門下生でもないにも拘わらず、このような不思議なたちで木原先生のお言葉に電撃的なまでの刺激を受け、それがその後の私の研究者としての生き方に、それほどまで影響したとは、不思議なご縁であったとしか言いようがない。人によっては私のことを生化学者といい、また別の人は私を遺伝学者と呼んだ。何と呼ばれようと私は構わないが、ただ一ついえることは、研究者としての私の根っこは、遺伝学にあったということである。

若い人たちが研究者として成長していく過程には、様々な出会いがある筈であり、中には私のように、その人にとって決定的とも言える影響を受ける場合があるかもしれない。たとえそれが一期一会の出会いだとしても、大切にすることが肝要であろう。

e-mail: y.shimura@nins.jp



遺 伝 学 は 新 し い

大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構

国立遺伝学研究所

所長 小原 雄治



遺伝研は法人1年が過ぎました。この中で、さる12月1日付けで遺伝研所長を拝命いたしました。遺伝研55年の歴史の中で第8代になるそうですが、前7所長にはあまりにも恐れ多く、また、前例・しがらみを排除するためにも「法人初代」として微力を尽くす覚悟ですのでどうかよろしく願います。

所長就任にあたってはおおむね好意的な励ましをいただきましたが、「遺伝研をぶっ壊すつもりで」に始まり、研究所の名前を変えたらどうか、というご意見も多くありました。「遺伝子科学研究所」「生命システム研究所」などなど。毎年の概算要求の際にも本省から言われたこともあります。いわく「古い感じがする、遺伝にはネガティブなイメージがある」。実は、法人設計の中で研究所の名前を変えることはありえましたが、熟慮の上、そうしなかった経緯があります。それは物理学が物質科学の中軸であるように生命科学の中軸が遺伝学と考えるからです。

現代遺伝学はメンデルのえんどう豆に始まり、モルガンのショウジョウバエ、そして大腸菌・ファージで分子生物学につながりました。このように様々な生物材料が使われてきたことは（よく考えてみれば）興味深いことです。多分、遺伝現象というものが生命の本質でありそれを司る共通のメカニズムがあることが直感的に感じられていたからだと思います。DNA二重らせんの発見でその実体が一挙に明らかでない、分子生物学によって大腸菌からヒトまでに共通する遺伝子メカニズムの多くが明らかにされてきました。生命メカニズムの普遍性です。

一方で**生命の特質**が多様性です。多様性があつたればこそ進化があつたはずです。ヒトの遺伝子見積もり数がだんだん少なくなってきた、遺伝子というものが実にいろいろの機能を果たしていることを実感させられます。遺伝子機能の多様性です。スプライシング変動といった直接的なものだけでなく、遺伝子の働きは細胞内外の環境要因で変わるからです。ゲノムや細胞コンテキスト次第とも言えます。遺伝子は単独で働くものではなく、化学物質も含め相手がいるわけですから当然でしょう。ゲノム／遺伝子と環境要因、この関係（システム）が生物を作り、行動させ、進化させてきたのであり、ここに生命の理解のカギがあると思います。

この**システムの理解**のためにも遺伝学のアプローチや考え方は非常に有効です。遺伝学ではシステムに攪乱を与えてそのリスポンスからシステム構造を理解できるからです。生命システム理解のために遺伝学はいつまでも新しいのです。これまでは遺伝バックグラウンドをそろえたモデル生物を使ってきましたが、これからは自然が作ってきた多様なゲノムとその表現型の比較、環境要因との関係など研究する環境遺伝学とでもよぶ分野が重要になると思います。しかしこのためには、分子生物学の勃興時のように、プラスアルファが必要です。わかりにくいとの評判をいただきましたが、遺伝研が統数研、情報研、極地研と共に作った情報・システム研究機構の枠組みがヒントを与えることを期待しています。

外国人留学生を受入れて

河野 重行 (東京大学新領域創成科学研究科先端生命科学専攻)

留学生が10万人を超えたと報道されたのは一昨年のことだから覚えている方も多いだろう。1983年に当時の中曽根内閣が、「留学生受入れ10万人計画」を発表して、2000年までに日本で学ぶ留学生をフランス並みの10万人にするといていたが、なぜフランスなのかよくわからなかったし、さしたる感慨もなかった。しかし、当時1万人に過ぎなかった留学生数が着実に増え、20年後には10万人になったと聴くと、フランス人ほどではないがこの日本を密やかに誇らしいと感じる。

国際交流は進み、私の研究室にも、遠くエジプトから留学生が来る時代になった。確かに留学生の受入れには問題も多い。「今年から大使館推薦による国費留学生の募集・選考方法が変わる」という通知を受けて、検討に入っている大学も多いことだろう。しかし、少々の弊害はあったとしても、慣れ親しんだ欧米中心の文化圏以外からの留学生受入は、結構エキサイティングで、それまで考えもしなかった視点を与えてくれる。「留学生受入れ10万人計画」の醍醐味は、そうした多角的視野を、研究室の若い学生みんなと共有できることにもあるようだ。

GSJ コミュニケーションズの編集長でもある石和会長から、留学生受入れ教員の意見とともに、留学生の肉声を聴きたいというリクエストがあった。私のところにいるエジプト人留学生のアムル・アジズ君は、エジプトからの国費留学生で、博士課程からの進学で3年間日本に滞在しこの9月で修了予定だ。本音を書くようにと頼んだが、アラブも保守的で建前が多い。しかし、よく読むと、心情は伝わってくる。

An Egyptian student in Japan: White champions and date palms

Amr Ageez

Approximately 65,000 years ago, humans started to leave Africa to see the rest of the world. Over the next thousand years or so people moved out into Asia and Japan. Three years ago, I decided to make a similar journey. I could not spend months and years on this trip, so I flew from Cairo to Narita airport, a trip that took fourteen hours. In this time period my title changed from being a research assistant at the Agricultural Genetic Engineering Research Institute (AGERI) in Egypt, to being a Ph.D. student at the University of Tokyo. Unlike those early travelers to Japan, I had many Japanese friends to explain things to me. After two months, I got used to the Japanese lifestyle, and now I eat more sushi than the average Japanese. However, I have discovered it is going to take me a very long time to learn the Japanese language.

Egyptian students like to continue their postgraduate studies in foreign countries. Studying abroad gives them a stronger CV when it is time to apply for a job. Moreover, they also learn new trends and ideas in the sciences, which leads to new ways of thinking. I am no exception. After many attempts, I was accepted by universities in Canada and the University of Tokyo. I chose Japan mainly because of the reputation of Tokyo, and because Japan is a safe country. I expected to face some difficulties with the language, but thought that would be a problem that I could handle.

My knowledge of Japanese consisted of three words, the words for atomic bomb and electronics, and “*Oshin*”, which is a very popular Japanese TV series broadcast on Egyptian TV. I did not expect to see *Oshin* in Japan, so I was very



福岡県二見ヶ浦海岸

surprised when I saw that series broadcast here. The way the Japanese care for their cultural heritage amazes me. In Egypt, we have temples and the Pyramids, but our artifacts are only for museums. As in any other country in the world, you can see the place, touch the stone, but you cannot touch the people who created such national treasures. The Japanese, however, seem able to preserve both places and practices. Attending a tea ceremony or any Japanese festival sent me back in time hundreds of years; seeing everyone in kimono, doing exactly what they have done for hundreds of years is a new experience for me. Moreover, I found it very strange that the residents of this advanced country prefer wooden houses and feel safe in them. The work ethic here is also impressive. In Japan, the working day does not end at five o'clock as it does elsewhere; it lasts all day. This is difficult for me, and for other foreigners in Japan. Here, I have to prove myself and work hard.



ヒロハノマンテマ

My campus is a new one in Kashiwa City. The campus is dedicated to the Graduate School of Frontier Sciences. As the word frontier implies, the new campus is advanced and modern. My research will focus on the flower of the white campion, *Silene latifolia*, a small herb that grows to about half meter in height. The flower is about 2 cm across. The white flower gives it the species name *latifolia*. *S. latifolia* is a dioecious plant. In dioecious systems, male and female reproductive organs develop on separate individuals. This is unusual in the plant kingdom, where almost all plants are hermaphrodites, producing male and female organs on one plant. By contrast, *S. latifolia* is like a human being. Individual *S. latifolia* plants are either male ($2n = 22 + XY$), bearing staminate flowers, or female ($2n = 22 + XX$), bearing pistillate flowers. *S. latifolia* is widely used as model system to study dioecious plants.

In Egypt and throughout the Arab region, the date palm (*Phoenix dactylifera* L.) is a famous long-lived dioecious monocotyledon that is cultivated for food, fuel, shelter, and fiber. This species is slow flowering and fruiting, and it is difficult to determine the sex of trees before the first flowering, which occurs when they are about five years of age. The date palm looks like a coconut palm, except that it produces sweet oblong fruit about 5 cm long. There is archeological evidence of *P. dactylifera* cultivation in eastern Arabia in 4,000 B.C. It is a much-respected plant, regarded as a symbol of fertility, and it is depicted on the coins of Saudi Arabia. It has long been grown on the French Riviera, in southern Italy, Sicily, and Greece, although the fruit does not reach perfection in these areas. *P. dactylifera* is dioecious, and staminate (male) and pistillate (female) flowers are borne on separate plants. Wind carries the pollen from male inflorescences to female inflorescences. Date growers who raise palms for commercial fruit production worry about the source of the pollen, especially the variety of *Phoenix dactylifera*. There are hundreds of varieties. In most other plants, the maternal genes determine the size, color, and taste of the fruit. By contrast, in *P. dactylifera*, the paternal genes affect the taste, sweetness, and color of the fruit. My studies on *S. latifolia* as a model dioecious plant could lead to applications that would improve the fruit of the precious plant of my home country, Egypt: *P. dactylifera*.



ナツメヤシ

<http://133.11.37.221/users/kawano/silene-group/s01.htm>

This document has been written by Amr Ageez who is a third-year PhD student in Department of Integrated Biosciences, Graduate School of Frontier Sciences, University of Tokyo

遺伝学と国際交流

——ユネスコ国際大学院バイオテクノロジー研修講座の講師として——

原島 俊 (大阪大学大学院・工学研究科・生命先端工学専攻)

関西空港を飛び立った時には少し肌寒く感じる位であったが、バンコク・ドンムアン国際空港に降り立つと、少し前までの大阪の真夏に引き戻されたように感じた。つい2、3日前まで遺伝学会で忙しくしていたためもあって、十分な講義の準備もせずに来てしまったことが急に胸にせまってきた。

昨年9月27日～29日の間、阪大吹田キャンパスで開催された第76回日本遺伝学会（大会実行委員長阪大微生物病研究所品川日出夫教授）を、実行副委員長としてお手伝いさせて頂いたが、その際、遺伝学会長の石和貞男先生と親しくお話をさせて頂く機会に恵まれた。

雑談の中で、「日本遺伝学会も今後近隣のアジア諸国との関わりを積極的に考えていく必要があるかも知れませんね」という石和先生のお話につられて、つい、遺伝学会の直後に、タイのバンコクにあるマヒドン(Mahidol)大学に「微生物遺伝学」の集中講義に出かける予定ですなどという話をしてしまった。そんなことをすっかり忘れてしまっていた矢先、「タイの大学に集中講義に出かけられると言っておられたと思いますが、“遺伝学と国際交流”のような話題で、GSJ コミュニケーションズになにか書いて頂けないでしょうか」とお電話を頂いた。とても書けるようには思えなかったのですが、お断りしたつもりが、どうしたところか今この原稿を書いている。

大阪大学は、「地域に生き、世界に伸びる」をモットーとしているが、筆者の所属する工学研究科応用生物工学専攻（4月1日から生命先端工学専攻生物工学コースと組織再編）は、大学直属の「生物工学国際交流センター」とともに、既に30有余年の長きに渡り、バイオテクノロジーを通して東南アジア諸国との国際交流に深く関わってきた。例えば、1973年から2003年までの30年もの間運営してきた「ユネスコ微生物学国際大学院研修講座(UNESCO International Post Graduate University Course in Microbiology)」と称する1年間の研修講座もそのひとつである。この講座は、ユネスコの国際大学院研修講座計画の一環として、アジア地域のユネスコ加盟国の科学者、特に大学の教員又は研究者に対して微生物学全般、特に産業微生物に関する専門的な研修を行うために設置されたものである。毎年、100名にも登る応募者の中から選ばれた14名の研修生が、最初の3ヶ月は大阪大学で講義を受け、その後の9ヶ月は、大阪大学（7名）、東北大学、東京大学、京都大学、九州大学（それぞれ1名ないし2名）に配属されて、それぞれの所属する研究室で研究を行うプログラムである。2003年に終了するまで、総計400名を超える修了生を輩出しており、修了生は皆、本国のバイオテクノロジーの発展に大きな貢献をしている。

このプログラムは2003年に終了したが、それが2004年に、「UNESCO Post Graduate Inter-University Course in Biotechnology」としてリニューアルされた。今回の訪タイは、その第一回めの講義を担当するためであった。新しいプログラムでは、Fundamental Course と Advanced Course の2つのコースが設けられ、応募時にいずれかを選ぶようになっている。それぞれのコースで若干カリキュラム（表）は違うが、研修生はいずれのコースに所属しても最初の1ヶ月（10月開始）はタイ国マヒドン大学で講義を受け、その後、マヒドン大学を始めとするタイ国の代表的な大学（チュラロンコン大学、カセサート大学、キンモンクット工科大学）、タイ国国立のバイオテクノロジーセンター、および大阪大学、東北大学、東京大学、京都大学、九州大学に配属され、そこで10ヶ月間の研究を行い、最後に、全員が大阪大学に集まって1ヶ月のまとめの講義を受講後、研究成果の発表を行ってコースを修了（9月）するものである。

カリキュラム（表）を見て頂くと、微生物遺伝学や分子遺伝学など遺伝学関係の講義はもちろん、バイオテクノロジーに関係する多様な授業科目が含まれていることがわかる。各先生方の講義の中味の詳細を把握しているわけではないが、遺伝学に関して言えば、純粋遺伝学というより、育種への応用を意識した応用遺伝学に重きがおかれている。私の役目は、遺伝学の導入とのことであったので、「Principle of Molecular Genetics」、「Advanced Molecular Genetics」と題するFundamental と Advanced の両コースの研修生に共通の講義を担当させて頂いた。当日は、午前10時から1日をかけて、午前中1コマ（1.5時間）、午後2コマ（3時間）の合計4.5時間の講義を行った。後日、色々な先生方によるさらに詳細な遺伝学関連の講義が予定されていることから、遺伝学で基本的に重要な事柄についての講義を行った。その内容は、「Genetics and Genomics」をキーワードとして、Geneticsの部分では、遺伝学、特に微生物遺伝学小史から始めて、遺伝学と分子生物学や遺伝子工学との違い、微生物遺伝学



表 ユネスコ国際大学院生物工学研修講座カリキュラム

最初の 1 ヶ月にタイ国マヒドン大学で行われる講義

Fundamental Course			Advanced Course		
Principle of Microbiology	3h	Recombinant DNA Methods	4.5h	Principle of Microbiology	3h
Principle of Biochemistry	3h	Taxonomy	3h	Industrial Microbiology	1.5h
Principle of Molecular Genetics	3h	Taxonomical Methods	3h	Biodiversity in Tropics I	1.5h
Principle of Biochemical Engineering	6h	Screening and Presevation of Microorganisms I	1.5h	Biodiversity in Tropics II	1.5h
Principle of Taxonomy	3h	Screening and Presevation of Microorganisms II	1.5h	Infectious Diseases in Tropics I	1.5h
Advanced Molecular Genetics	1.5h	Industrial Microbiology	1.5h	Infectious Diseases in Tropics II	1.5h
Advanced Biochemistry	1.5h	Biodiversity in Tropics II	1.5h	Food Microbiology I	1.5h
Recent Trends in Taxonomy	1.5h	Biodiversity in Tropics II	1.5h	Food Microbiology II	1.5h
Basic Chmistry	1.5h	Infectious Diseases in Tropics I	1.5h	Biochemical Engineering	4.5h
Basic Chemistry Practice	1.5h	Infectious Diseases in Tropics II	1.5h	Advances Biochemical Engineering	3h
Microbiology	4.5h	Food Microbiology I	1.5h	Advanced Microbiology I	1.5h
Microbial Methods	4.5h	Food Microbiology II	1.5h	Microbiology II	1.5h
Biochemistry	4.5h	Biochemical Engineering	4.5h	Advanced Microbiology II	1.5h
Biochemical Methods	4.5h	Thai/Japanese Lessons	21h	Microbiology III	1.5h
Principle of Chemical Analysis	3h	Project-oriented Study	30h	Advanced Microbiology III	1.5h
Methods of Chemical analysis	3h	Presentation	8h	Microbial Genetics I	1.5h
Molecular Genetics	4.5h	Total	140h	Advance Microbial Genetics I	1.5h
				Microbial Genetics II	1.5h
				Advance Microbial Genetics II	1.5h
				Microbial Genetics III	1.5h
				Advance Microbial Genetics III	1.5h
				Environmental Microbiology I	1.5h
				Advancesd Environmental Microbiology I	1.5h
				Environmental Microbiology I	1.5h
				Advancesd Environmental Microbiology II	1.5h
					Total
					140h

最後の 1 ヶ月に大阪大学で行われる授業

Advanced, Fundamental 共通		
Intellectual Property Right	3h	Microbial Physiology
Biodiversity and Its Application	3h	Microbiola Ecology
Bioethics	3h	Probiotics
Biosafety and Regulation	3h	Microbial Oil Production
Industrial Fermentation	3h	Anaerobic Fermentation
Advanced Instrumental Analysis	3h	Microbial Enzymes
Venture Business Development	2h	Tissue Engineering
Extremophiles	3h	Project-oriented Study
Microbial Waste-water Treatment	3h	Total

の特徴などを述べた後、遺伝子発見法としての突然変異や抑圧変異の分離、合成致死変異株の分離、two hybrid 法、one hybrid 法などを説明し、その後、優性劣性試験、相補性試験、上位下位試験、連鎖分析などの種々の遺伝解析法とそれから得られる情報を解説した。Genomics の項では、ゲノムサイエンスの勃興、ゲノムサイエンスの考え方、系統的な破壊による遺伝子機能解析法、DNA マイクロアレーなどによる網羅的な遺伝子機能解析技術、さらには、DNA マイクロアレーの技術とクロマチン免疫沈降法を組合わせた新しい遺伝子機能解析法やそれを用いて得られた最新の成果などについての講義を行った。また、私の専門が酵母遺伝学であることもあって、応用遺伝学の話題として、産業酵母（実用酵母）の育種技術についても触れた。ご存知のように、酵母（*Saccharomyces cerevisiae*）は著量のエタノールを蓄積することから工業用アルコールの生産に使われたり、清酒やビールの醸造、パン製造に使われているが、そこで使われているいわゆる実用酵母（その多くは *S. cerevisiae*）は、研究室で扱っている *S. cerevisiae* 酵母と種は同じであるにもかかわらず、色々な育種技術を適用することは大変困難である。その理由は、例えば、i) 実用株は倍数体のため突然変異株の分離が大変困難である、ii) 接合による育種を行おうとしても、そもそもほとんどの実用株が接合能を失っている、また、iii) 減数分裂を通して子孫を分離しようとしても胞子形成能を示さない、iv) 細胞融合や形質転換を行おうとしても、実用株は栄養要求を持っておらず、薬剤耐性などの有効な選択符号が十分に無いために、細胞融合体や形質転換体を選択することができない、などである。こうしたことを克服して、実際に工場現場で用いられている実用株をいかにして育種改良するかの技術についての講義を行った。

東南アジアの研修生に講義をした時にいつも感じることであるが、研修生は、いずれも大変勉強意欲が高く、日本人学生と違って質問も臆せずしてくるので、講師としては非常に面白くやりがいがある。下手な英語で色々な質問に声を張り上げて一生懸命答えていると、夕方にはさすがに声が枯れてきてしまったが、なんとか 4 時間半の講義を終えることができた。10ヶ月後の日本での再会を約して講義を終了したが、その時の研修生のうちの 1 名（女性でタイ国ナレソワン大学の講師（写真））は、その後、筆者の研究室に配属されて、現在、「ゲノム工学による実用酵母の新しい育種技術の開発」をテーマに熱心に研究を行っている。

東南アジアの研修生に講義をした時に思うもうひとつのことは、「基礎と応用」ということである。筆者を含めて日本遺伝学会の会員の多くは、純粋な学問として遺伝学の研究を行っている方々であろう。基礎的な学問としての遺伝学的重要性は論を待たないし、また、長い目でみれば、どのように基礎的な仕事であろうとも、応用へ

の展開があるはずであろうから、あまり気にすることは無いと言われるかもしれないが、やはり、東南アジアの国々からの研修生からは、「それはどのような応用が可能か」、などの質問をよく受ける。講義の中での応用、それも産業への応用についての明確な目的意識を出す事ができないでいると、いまひとつ興味を持ってもらえないように感じられる。基礎的な遺伝学と応用遺伝学をバランスよく講義できればと、いつも思う次第である。

さて、こうした集中講義が真の国際交流になっているかどうかは心許ないところではあるが、近年、日本遺伝学会でも国際シンポジウムを開催し、欧米の科学者を招いての特別講演などがしばしば行われている。そうした国際シンポジウムでは、通常、それぞれの分野で顕著な足跡を残された方々、あるいは最先端の成果を出しておられる方々をお迎えして講演をお願いすることが多い。学会が、専ら最先端の学問を追求していくためにあるというふうに考えれば、それはそれで良いとは思いますが、学会活動をもう少しゆったりしたものと考えれば、ひとつの方向として、近隣諸国の関連学会や研究者との交流も視野に入れてもよいのではないだろうか。遺伝学に密接に関連した染色体の分野などでは、東アジアの研究者との交流が盛んであると伺っている。研究レベルについても、例えば、筆者が関係するバイオテクノロジーの分野などでは近年韓国などで大変レベルの高い研究が行われている。応用的な指向が強い研究も多いが、遺伝学がもともと育種学と深い関係にあることを思えば、関心のある会員の方も少なくないのではないだろうか。また、直裁的な応用を目指した研究の中にも学問的に面白い問題、あるいは奥の深い問題がある場合もあるのではないかと思う。国際交流あるいは国際貢献は何のためにするかという基本的な問いかけとも関係してくるが、近隣アジア諸国との遺伝学を通じた交流も学会のひとつの活動のあり方のようにも思われる。

今回のタイ訪問は、2年程前に、タイの国立研究所「バイオテクノロジーセンター」が主催した「Yeast Genetics and Molecular Biology」と題されたワークショップの講師として呼んで頂いたことを含め、筆者にとって4回目の訪問であった。旧知のマヒドン大学の先生方が、いつものようにおいしいタイ料理とシンハービールで歓迎して下さい。たったの4日間であったが、忙しい日本での生活を忘れさせてくれるひとときを過ごすことができ、今回大変良い思い出となった。空港まで送ってくれたマヒドン大学のアタウト博士と近い将来の再会を約し、真夏のように暑いドンムアン国際空港を後にした。

——夏休みイデンケン体験入学プログラム——

国立遺伝学研究所（イデンケン）で研究体験してみませんか！

今年も遺伝研では、例年好評の体験入学プログラムで、短期（10日間）の体験入学生を募集します。実際に遺伝研の研究室に所属し、研究を体験してもらうプログラムです。大学生あるいは大学院修士の学生であれば応募可。期間中は所内のゲストハウスに滞在し、実験、研究だけでなく、論文紹介クラブや研究結果の討論会などに参加できます。

夏休みを有効に過ごし、キャリアを高めるための絶好の機会です。

日 時： 2005年8月17日(水)～8月26日(金)

場 所： 静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所

募 集 人 数： 10名程度

参 加 費： 無料（旅費及び宿泊費の支援制度があります）

応 募 締 切： 7月1日(金)

提出書類・応募方法：ホームページ (<http://www.nig.ac.jp>) をご覧ください。

結果の通知： 7月11日(月)までに応募者の希望の方法（メールまたは郵便）にて連絡します。

連絡先・応募書類提出先： ☎411-8540 静岡県三島市谷田1111

国立遺伝学研究所・総務課総務係（大学院担当）

E-mail: info-soken@lab.nig.ac.jp

Tel: 055-981-6720 or 6707

主 催： 総合研究大学院大学

総研大では以下のところでも体験入学を行います。

総合研究大学院大学・葉山キャンパス (<http://www.soken.ac.jp/index.html>)

基礎生物学研究所・基礎生物学専攻 (<http://www.nibb.ac.jp/>)

生理学研究所・生理学専攻 (<http://www.nips.ac.jp/>)

ショウジョウバエ遺伝資源センターの設立と今後

山 本 雅 敏 (京都工芸繊維大学ショウジョウバエ遺伝資源センター)

平成17年3月末、カリフォルニア州サンディゴ市で開催された 46th Annual Drosophila Research Conference に出席していた際に、思いがけず日本遺伝学会会長石和先生からメールで、ショウジョウバエ遺伝資源センターについて何か書くようにとの連絡を受けました。ショウジョウバエ遺伝資源センターは平成11年に文部省令施設として認可され、すでに数年が経過しており、国内の認知は得ていると思っていたのですが、我々が希望しているほど周知されていない可能性もあります。いい機会を与えて頂いたことで、改めて、センター設立の概要を説明させていただき、国内のショウジョウバエ研究者からの更なるご支援やご理解を得るきっかけになれば幸いです。

なぜ京都工芸繊維大学にショウジョウバエか？

これまでにショウジョウバエ遺伝資源センターを多数の方が訪ねて下さっています。ショウジョウバエ研究者以外の方々からは、なぜ京都工芸繊維大学にこのような施設が設立されたのですかと聞かれます。つい先だっの国立遺伝学研究所遺伝資源委員会の懇親会でも、‘なぜ’と同じ質問が出ました。おそらく‘答え’となるのは、ショウジョウバエ遺伝資源センター報にも掲載させていただきましたが、当時の文部省担当課長の言葉を借りると、‘熱意’と言う事かもしれません。施設の建設が始まった時、改めて感謝した事は、ショウジョウバエ遺伝資源センターの組織と施設の認可に至るまでの長い、険しい道のりに関わって下さった多くの方々の援助と熱意です。当時の文部省担当課長、専門員、係長、本大学学長、局長、会計課長、係長、渡辺教授。誰一人欠けていても、ショウジョウバエの研究センターの設立は不可能だったに違いありません。難産でした。会計課長、係長、それに私三人で、文部省に朝の3時頃まで居残り、有馬文部大臣の初登庁を階段で迎

えたこともありました。段ボール箱6個分くらいの資料を作成しました。ヒアリングから帰ってきた次の日に文部省に改訂版を届けた事もあります。そのために、A4一枚の紙を持って文部省まで日帰りしてくれた事務主任もいました。全員がショウジョウバエ遺伝資源センターの設立に協力的でした。長い闘いでした。会計課長がもうあきらめませんか、私への苦言か、弱音か、不毛に終わりそうだったと思ったからか、三回ほど私に確かめた事があります。諦めませんでした。当時の資料にも書きましたが、寄生木(やどりぎ)的研究しか出来ない環境から、決して独自の研究は生まれない、という信念があったからです。国立遺伝学研究所時代から、森脇先生や井山先生との話や、データベース作りに参加させて頂く中で、ショウジョウバエ系統のしっかりした研究センターが国内に必要であるという考えが固まっていました。しかし、実現した事は、非常に幸運だったと思います。完璧な人の和があったからこそと今も確信し、感謝しています。国内の一研究室で最大数の系統維持を行っていた実績に加え、これが、京都工芸繊維大学にショウジョウバエ遺伝資源センターが生まれた背景です。思い返すと、未知の世界へのチャレンジであり、生まれるとは思えないところに純粋に努力した、いい思い出になった数年間でした。

平成12年4月には京都工芸繊維大学嵯峨キャンパスにセンター棟の建設が始まりました。年末の完成とともに間借りしていた応用生物学科からショウジョウバエ系統を移動しました。こうして平成13年3月には竣工記念式典を開催する事が出来ました。ここから、本格的にセンターの運営が始まりました。苦しいとは言え、これまでは新しく作る楽しさと喜びがありました。とにかく前に進むだけでした。しかし、出来上がってみると、センターを守り、育てなければならない責任感が襲ってきました。



設立に深く関わった事務職員も現在のセンターを見て、幸運だったと感じているようです。確かに、幸運でした。準備をしていたこととはいえ、ショウジョウバエを愛し世界のどこかで重要な系統の存続を願っている研究者と信頼し合えたことです。非常に有り難い事でした。それは、設立と同時に、当時世界第二の規模でショウジョウバエ系統を維持していたスウェーデン王国ウメオ大学から重要な系統全ての寄託要請を受けた事です。数年前から、欧州ではショウジョウバエ系統の維持が研究費の面で困難になっていたのです。日本にショウジョウバエ遺伝資源センターが設立されれば全てを引き受けるから、もうしばらく頑張って維持して欲しいと、文部省にヒアリングに行っている時にも、お願いをしていました。もし、設立できていなければ、大変な迷惑をウメオ大学の Rasumuson-Lestander 教授に与えた事になります。資金繰りをしながら、約1年半系統維持を続け、京都に、系統を送り届けてくれた彼女の努力に深く感謝する次第です。

ナショナルバイオリソースプロジェクト「ショウジョウバエ」

京都工芸繊維大学の系統に加えて、ウメオ大学の系統と国立遺伝学研究所からP挿入系統を受入れました。センターの系統はダニやカビの汚染がないクリーン系統として維持することを最優先し、全て厳密な検疫を行いました。ヨーロッパの系統センターは閉鎖され、新たに日本に系統センターが生まれ、アメリカ合衆国のブルミントン系統センターと協調して運営する路線を計画している丁度その時、文部科学省の委託事業「新世紀重点研究創世プラン (RR2002) の一環としてナショナルバイオリソースプロジェクト (NBRP) が発足する事になりました。国が特に重要と認めた生物遺伝資源について、体系的な収集、保存、提供体制を整備することを目的にした国家プロジェクトです (<http://www.NBRP.jp/>)。ショウジョウバエもこれに参加すべく、当時インディアナ大学に在在外研究員で滞在していたので、手元に資料などない不便な状況の中、オフィス一室を与えて頂き、プロジェクトの計画書を仕上げました。ショウジョウバエ遺伝資源センターを設立したことは 'brave decision' だと揶揄されながらも、国際的視点からショウジョウバエの系統について話し合いができた事は本プロジェクトの計画を立てる上で最高のタイミングでした。この時、明確なものではなかったのですが、ショウジョウバエ系統センターとして本当に国際的センターになる将来計画が見えた気がします。本プロジェクトによって、世界第一のショウジョウバエ遺伝資源の収集、維持、提供事業を展開する研究機関に脱皮しようと計画しました。

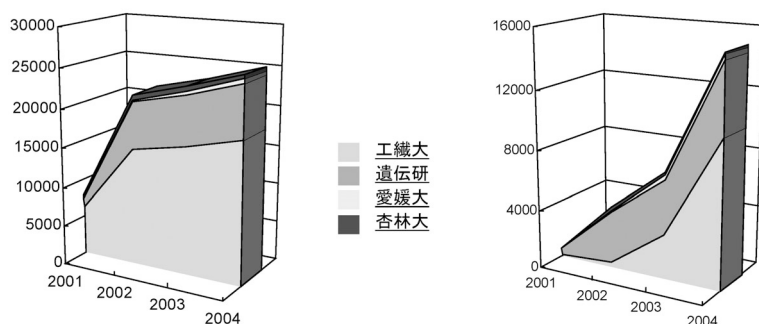
平成14年7月、ショウジョウバエ遺伝資源センターがNBRP「ショウジョウバエ」の中核機関となり、平成14年7月からプロジェクトが開始されました。早速、ブルミントンと基本的に重要な系統(可視突然変異体、バランサー、欠失、重複など)を持ち合うこととして、それぞれの系統センターに固有の系統をより多く維持できる方法を探るようになりました。約4,000系統はブルミントンと共通です。現在ショウジョウバエ遺伝資源センターに固有の系統は、NP系統、Gal4-UAS系統(GS, LA), Protein Trap系統, T(X;Y), T(A;Y) などです。平成15年7月には、系統数が10,000を突破し、それを記念してオーストラリアGreat Barrier Reef Drosophila Conferenceで国際的系統提供のデビューを果たしたのですを宣言しました。ショウジョウバエ遺伝資源センター(DGRC)の存在を少しでも多くの研究者に知ってもらうために、系統提供無料キャンペーンを行ったのです。これは、ねらい通り、国外からの提供依頼が増え提供体制を充実させるための契機になるとともに、国外からの提供依頼が増えました。弾みがつきました。その年の9月には、系統数は15,000となり、ブルミントンのそれを追いついたのです。サブ機関(国立遺伝学研究所、愛媛大学、杏林大学)との合計系統数は断然世界最大群を抜きました。です。それだけの系統を維持するキャパシティを作り上げる作り上げたことができた点が重要評価点です。

この系統収集キャパシティを45thと46th Annual Drosophila ConferenceのFly Boardで公表しました。高い系統維持能力は系統センターとして必須です。国際的系統管理機関として受入れられるとともに、期待される面も大きくなりました。膨れあがる必要系統に対し、日米両国の遺伝資源センターで協力し合えばいいのではないかと意見が出されるまでになったのです。

21世紀の生命科学研究は目覚ましい発展が期待されています。なかでもショウジョウバエは、生命機能の遺伝子ネットワークの解明、比較ゲノム学からの進化・適応の遺伝子調和性など、複数遺伝子による生命機構の解明に重要な研究用モデル生物として今まで以上にその価値が高まるでしょう。疾病原因遺伝子だけでなく、ゲノムワイドに関連遺伝子を探索する研究が行われ、ゲノム配列情報に基づいた全遺伝子に対する人為的突然変異系統がこれから最も必要とされるに違いありません。今まで以上に多くの系統を維持し、系統に関する詳細で正確な情報管理がますます要求されるようになります。

ブランドロイヤリティの確立に向けて

バイオリソースプロジェクトのおかげで前例のない多くの系統が維持できるようになり、研究者から



系統維持数の推移（左）と提供系統数の推移（右）。
NBRP のサポートは 2002 年度から受けている。

の寄託も受け入れています。一昨年、日本ショウジョウバエ研究会総会で紹介しましたように、「あなたのラボのインキュベータ」としてショウジョウバエ遺伝資源センターを活用して頂きます。それで研究業績が上がれば、センター設立の意義があったということですし、利用者にとってさらに便利になると思います。いくつかの研究室からは、スクリーニング用に、毎週200～300系統の送付依頼が舞い込みました。センターのメンバーには研究上のメリットはありませんが、研究支援を業務と考え毎週系統を送っています。しかし、研究に使用した結果面白い系統が見つかったとか、系統リストの表記と異なりPエレメントの挿入位置が異なっているとか、フィードバックが少ないのです。系統を用いて得られた実験結果、いや系統の特性情報は、次の利用者への貴重な情報なのですが、情報の吸収と間違いを責めることに厳しい状況はあっても、公益性の高い情報の提供はほとんどありません。ショウジョウバエ研究者コミュニティはショウジョウバエ研究者相互のコミュニケーションで成立します。利用者からのフィードバックが、系統の品質を高め、再現性の高い実験結果を得ることになります。研究成果の信頼性の向上は利用者に依存していると言っても過言ではありません。ごく限られたセンターのメンバーでは不可能な系統の品質管理も研究者コミュニティの支援で可能になります。系統の高信頼ブランド‘KYOTO’を作り上げる。これがこれからの私の計画です。

ここ数年のショウジョウバエ系統の維持数と提供数をグラフで示しました。NBRPプロジェクトの重要性とこれから将来においても継続されるべき必要性が読みとれると思います。NBRPは平成18年度までのプロジェクトです。ショウジョウバエ遺伝資源の重要性を理解して頂き継続されるよう最大限の努力を払いたいと考えています。

ショウジョウバエ遺伝資源センター設立の経過と現在の運営状況そして今後の方向について簡単に述べましたが、ショウジョウバエ遺伝資源の収集、維持は、これから様々な面でいろいろと考えなければならない問題が出てきます。知的所有権、生物多様性条約、研究室設計、研究費申請と遺伝資源維持の見通しなど、国際状況を考慮して整備していかなければなりません。欧米では研究費の配分に先立ち研究成果として得られる系統の維持管理をどこで行うかについての確認を取るようになっています。維持系統の選択も重要な問題です。この件について、また機会がありましたら、国内外の研究状況の比較をしながら述べてみたいと思います。ショウジョウバエ遺伝資源センターの運営の継続と支援体制の整備は、皆様のご理解とご協力が不可欠です。見守っていただきながら、活発なご利用とご意見をお願い致します。

参考文献

- K. A. Matthews, T. C. Kaufman and W. M. Gelbart. Research resources for *Drosophila*: The expanding universe. NATURE REVIEWS GENETICS, Vol. 6: 176–193
- E. Bier. *Drosophila*, the golden bug, emerges as a tool for human genetics. NATURE REVIEWS GENETICS, Vol. 6: 9–23
- K. T. Venken and H. J. Bellen. Emerging technologies for gene manipulation in *Drosophila melanogaster*. NATURE REVIEWS GENETICS, Vol. 6: 167–178

いま進化遺伝学がおもしろい

澤 村 京 一 (筑波大学大学院生命環境科学研究科構造生物科学専攻)

ショウジョウバエの種分化をやろうと研究室の門を叩いたときには、「今どき珍しい学生」と思われてしまった¹⁾。当時、遺伝子頻度を云々する集団遺伝学は全盛であったが、新しい種の誕生を議論するようなことは科学ではない(別の言い方をすれば、どんな仮説でもまかり通る)といった雰囲気だった。これが昨今では、雑種致死や不妊の原因となる「いわゆる種分化遺伝子」が続々と分子レベルで特定されるようになり²⁾、種分化の研究はハードな学問となった。いまでは遺伝学だけでなく、生態学からも注目される分野になりつつある³⁾。

現在、進化遺伝学は猛烈な勢いで発展している。ひとつにはモデル生物の全ゲノム塩基配列が決定され、それが近縁種ゲノムへと波及してきたからであろう。発現調節を含めた遺伝子の網羅的な比較が可能となり、より正確な系統樹が描けるようになってきた。発生学から形態進化へという研究者の流れも続いている。分子生物学あるいは情報生物学の素養のある人に今後の研究テーマとして、ぜひとも進化遺伝学をお奨めしたい。

ところで、私は約3年前に現在の職を得て、これを機会に研究テーマも交配後隔離(雑種致死や不妊)から交配前隔離(性的隔離)へとシフトした。種分化にとってこちらの方が大事だというわけではないが、同じような興味の転換は多くの研究者に共通のようである。雑種致死や不妊は、ふつうの生物学と同様に分子の言葉で説明できる時代がやってきたので、ちょっと物足りない(誰がやっても同じ結論になる)といったところだろうか。性的隔離は解析の手法も研究者ごとに工夫の余地があり、わくわくすることがまだ転がっているようである。

筑波大学の進化遺伝学研究室といえば、創設者である黒川治男名誉教授が手がけられたカオジロショウジョウバエの性的隔離研究のイメージが強かった⁴⁾。最近アナナスショウジョウバエの論文も出ているが、小熊讓教授が学生時代にもこれを材料として使っておられたということは最近知った⁵⁾。この種にはきわめて近縁なバリドーサショウジョウバエがあり、これらの間には交配後隔離がない。いろいろな遺伝的構成の雑種が自由に作れるので、性的隔離を研究するにはもってこいである。私は研究材料もキ



前列左から 澤村京一、小熊 讓、須永 亮
後列左から 高野陽輔、東山亜紗子、志 華、名古屋のぞみ、張 文浩

イロショウジョウバエ類からアナナスショウジョウバエ類へと乗り換えた。

こちらへ赴任してはじめたテーマは、アナナスショウジョウバエ類がどうやって同種と異種を識別するのかということである。雄の求愛歌に対する雌の受容性が重要であることが、これまでの研究で分かっている⁶⁾。これに関与する遺伝子を分子レベルで特定する、というのが目的である。ここで、単為生殖を利用することを考えた。これらの種には、未受精卵の染色体が倍化して発生する系統が知られている⁷⁾。これを利用すれば、雑種雌の次世代において、2種のゲノムを混ぜ合わせてホモ接合化したクローンができる。

これまでに約270系統を確立したが、その過程で予期しない現象が見つかった。異なった染色体にある遺伝子はふつう独立に遺伝するが、これらの間に見かけの連鎖が認められたのである。減数分裂の際に、同種由来の染色体が同一極に分配される傾向があるのかもしれない。あるいは、適応度が低い遺伝子の組み合わせ（遺伝的不和合）は、系統から選択的に排除された可能性もある。現在、この発見は論文として投稿中である。今後はこれらの系統を利用して配偶行動を観察することにより、性的隔離に関与する遺伝子をより詳しく解析する計画である。

- 1) 渡辺隆夫（1995年）「ショウジョウバエ物語（裳華房）」の119頁より引用
- 2) C. T. Ting et al.（1998）Science 282: 1501–1504; D. A. Barbash et al.（2003）PNAS 100: 5302–5307; D. C. Presgraves et al.（2003）Nature 423: 715–718.
- 3) K. Sawamura & M. Tomaru（2002）Popul. Ecol. 44: 209–219.
- 4) H. Kurokawa（1963）Jpn. J. Genet. 38: 1–5.
- 5) 森脇大五郎（1988年）「遺伝学ノート（学会出版センター）」
- 6) M. Doi et al.（2001）PNAS 98: 555–560.
- 7) M. Matsuda & Y. N. Tobarí（2004）Genet. Res. 83: 83–89.

平成17年度東レ科学技術賞および東レ科学技術研究助成の 候補者推薦要領の概要について

記

I. 東レ科学技術賞（概要）

1. 候補者の対象……貴学協会に関する分野で、下記に該当するもの
 - (1) 学術上の業績が顕著なもの
 - (2) 学術上重要な発見をしたもの
 - (3) 重要な発明をして、その効果が大きいもの
 - (4) 技術上重要な問題を解決して、技術の進歩に大きく貢献したもの
2. 科学技術賞……2件前後。1件につき、賞状、金メダルおよび賞金500万円
3. 候補者推薦件数……1学協会から2件以内
4. 推薦締切期日……平成17年10月7日（金）弊会必着

II. 東レ科学技術研究助成（概要）

1. 候補者の対象……貴学協会に関する分野で国内の研究機関において自らのアイデアで萌芽的基礎研究に従事しており、今後の研究の成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところが大きいと考えられる若手研究者（原則として推薦時45才以下）
2. 研究助成金……総額1億3千万円。1件3千万円程度まで 10件程度。
3. 候補者推薦件数……1学協会から2件以内
4. 推薦締切期日……平成17年10月7日（金）弊会必着

*各推薦書用紙は、ホームページからもダウンロードできます。（平成17年6月中旬から可）

URL: <http://www.toray.co.jp/tsf/index.html>

ゲノム動態と環境応答

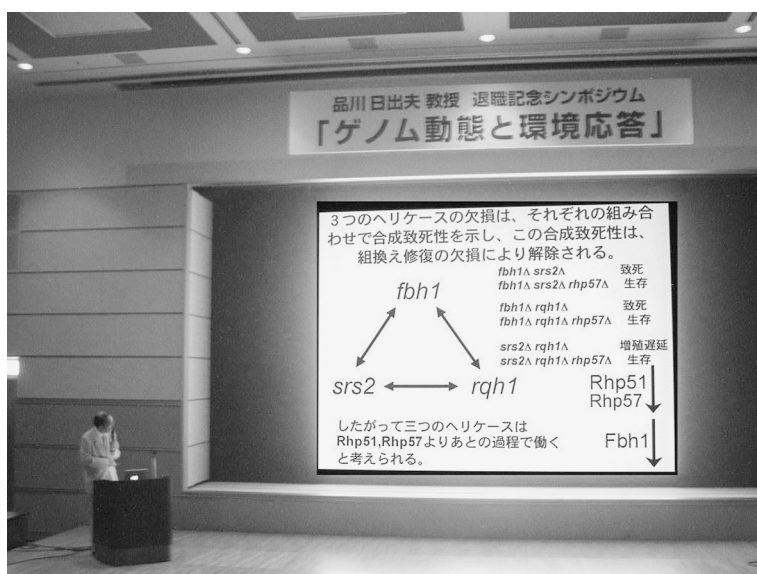
—— 品川日出夫教授退職記念シンポジウム開催の報告より ——

石 野 良 純 (九州大学大学院農学研究院)

品川日出夫教授が本年3月31日に大阪大学微生物病研究所を定年退職される日を迎えられた。そこで品川教授が助手の時代からお世話になってきた私と岩崎博史さん（横浜市立大院）が中心になり、ご退職の記念事業主催による学術シンポジウム「ゲノム動態と環境応答」（品川教授命名）を企画した。品川先生と長年親しく交流してこられた先生方に講演と司会をお願いして、去る5月14日大阪の千里ライフサイエンスセンターで開催したシンポジウムは遠方からも多数のご来聴をいただき、大変盛会であった。品川教授は若い時から、大腸菌を使ってSOS応答やリン酸レギュロンという遺伝子発現の環境応答に関して、遺伝子操作を利用した分子生物学的研究を展開され、それらの研究を通して得られてきた情報と技術を生かして、DNA組換え修復の分子機構の解析を徹底的に探求して来られた。このような研究史を反映して、記念シンポジウムでは遺伝子発現の環境応答とゲノム安定性維持機構に関する話題を、品川グループの3名のほかに、5名の先生にご講演いただいた。

まずはじめのセッション（座長：佐野浩 奈良先端大教授）は遺伝子発現の環境応答に関する内容で、岡 穆宏教授（京大化研）と石浦正寛教授（名大遺伝子）が、シロイヌナズナを用いて、それぞれサイトカインによる遺伝子転写の応答に関する分子機構と、遺伝子発現のサーカディアンリズム機構に関する遺伝子の網羅的解析システムについて話され、植物遺伝子発現の環境応答についての最先端の研究結果が紹介された。石浦教授はさらに、藍色細菌のサーカディアンリズム機構に関するキープ質 KaiA, KaiB, KaiC について結晶構造解析や電子顕微鏡観察などの構造生物学的な成果も紹介され、生物時計装置の原子レベルでの解明にむけた研究の進展が伺えた。

次のセッション（座長：花岡文雄 阪大教授）では、DNA複製と修復との接点を中心にして、3名の先生に講演いただいた。我が国のDNA複製研究のリーダーを勤めてこられて、品川教授とは阪大微研で10余年共に過ごされた杉野明雄教授（阪大生命機能）が、酵母を用いて、真核生物のDNA複製開始の分子機構の先端を紹介さ



れると共に、DNA ポリメラーゼ ϵ の役割についてまとめられた。大森治夫助教授（京大ウイルス研）は、突然変異がどうしておこるのか？というタイトルで、現在の中心テーマであるヒトでの損傷乗り越え型（TLS; Translesion synthesis）DNA ポリメラーゼの研究を行うようになった経緯を、ファミリー Y DNA ポリメラーゼの歴史とともに紹介された。また山泉克教授（熊本大医）も DNA 複製時の DNA 鎖上の損傷に対する修復の分子機構について Rad18, Rad6 の機能解析を中心に話され、DNA 損傷に応答した Rad18 による PCNA のユビキチン化と Pol η のローディングとの関係を議論されて、TLS 機構を中心とする修復に関する高等動物での応答機構の最先端を伺うことができた。

そして最後のセッション（座長：柴田武彦 理研上席研究員）では、品川、岩崎、石野の3名で、品川先生を代表とする科学研究費特定領域研究で共に研究を進めてきた内容を紹介した。私は、第3の生物と呼ばれるアーキアに興味をもって、十数年前からアーキアの研究を始めたが、1995年よりアーキアの組換え修復機構に関する研究を本格的に開始した。ゲノムプロジェクト以前であったから、アーキアが真核生物の Rad51 や Orc1/Cdc6 とよく似た蛋白質をコードする遺伝子を有することや、組換え中間体 Holliday junction を切断するアーキア特有の酵素 Hjc を発見して大変興奮したことから現在までのアーキア組換え修復研究の浅い歴史と今後の展望を話した。岩崎助教授は横浜国立大学で独立後に分裂酵母を用いて展開している、Swi5 が関与した新しい Rad51 依存の組換え修復の経路に関して遺伝学的解析結果を中心に話し、組換え修復機構解析の新しい展開が伺えた。そして最後に品川教授が自らの研究史を振り返り、過去に手がけられた種々のテーマを概説されながら、相同的 DNA 組換えの後期過程における RuvA, B, C タンパク質による Holliday 中間体分離の分子機構に関するすばらしい研究成果のまとめ、そして現在活発に進行中の、分裂酵母を使ってスクリーニングされて得られた組換え修復に関する数々の新規遺伝子の機能解析の現状と展望を紹介された。

品川教授は、ゲノム動態とその安定性維持機構および、遺伝子発現の環境応答機構に関する研究の発展に多大の貢献をされると共に、この研究領域の指導者として、多くの研究者の指導、育成に尽力された。DNA の複製、修復、組換えという 3R (replication, repair, recombination) 研究について、それまでそれぞれの領域の研究者が独自に進めてきたが、細胞内においては密接に関係し合った協調的な生命現象として理解していく必要があるという認識のもと、3R Symposium という我が国主導の国際会議を立ち上げられ、設立オーガナザーとして第一回を主催された。現在 3R の研究領域では世界的に認識される多くの日本人研究者が活躍していること、そしてまた、優秀な中堅、若手研究者も育ってきている状況を見ても、3R は我が国を代表する大変活発な研究領域の一つであると思う。本年第5回（隔年開催）を迎える 3R シンポジウムにも、国内外のこの領域の第一線の研究者と今後を担っていく若手研究者、大学院生が集い、活発な討論が展開されるであろう。品川教授の残された功績が、分子遺伝学を志す多くの若手研究者が育つ礎となることは間違いない。

2005年度日本遺伝学会 会費納入についてのお願い

本会の会費は前納をたてまえております。2005年度分（Genes & Genetic Systems Vol. 80 を含む）の会費を、御納入下さいますようお願いいたします。学生会員の方は在学証明書かそれに代わるもの（振替用紙の通信欄に指導教官などの署名・捺印）をお送り下さい。

1年以上の滞納者は会則第5条によって会員の資格を失いますのでご注意ください。

記

普通会員	10,000円
学生会員	6,000円
外国会員	10,000円
機関会員	15,000円
賛助会員（1口）	20,000円

〒411-8540 静岡県三島市谷田1111
 国立遺伝学研究所内
 日本遺伝学会
 電話 055-981-6736
 FAX 055-981-6736
 振替口座番号 00110-7-183404
 加入者名 日本遺伝学会

（この納入のお願いは本会記事綴じ込みのもので、すでに会費を納入された方にも、お送りいたしております。その節は失礼の段お許し下さい。）

第42回 アイソトープ・放射線研究発表会・日程表

会 期 平成17年 7 月 6 日(水)～7 月 8 日(金)

会 場 日本青年館 国際ホール、301会議室、302会議室、3 階ロビー、501会議室

〔東京都新宿区霞ヶ丘町 7 番 1 号 ☎03-3401-0101〕

会場 日時	国際ホール	301 会議室	302 会議室	3 階ロビー	501 会議室
第一日 7月6日(水)	午前 10:00 ライフサイエンスへの利用(1) p. 3 11:15 ライフサイエンスへの利用(2) p. 3	10:00 陽電子消滅(1) p. 4 11:00 陽電子消滅(2) p. 4	10:00 放射線測定機器・測定法(1) p. 5 11:15 放射線測定機器・測定法(2) p. 5	11:30 ポスター発表Ⅰ開始 p. 13	9:00 機器展示開始
	午後 13:30 特別講演 1 脳の画像診断 p. 3 15:00 パネル討論 1 放射線防護に用いる線量概念はどうあるべきか p. 3	13:00 陽電子消滅(3) p. 4 14:00 陽電子消滅(4) p. 4 15:00 放射線効果(1) p. 4 16:00 放射線効果(2) p. 5	13:30 放射線測定機器・測定法(3) p. 5 14:30 放射線測定機器・測定法(4) p. 5 16:00 安定同位体 p. 6	13:00 ポスター発表Ⅰ 責任時間 13:30	18:00 機器展示終了
18:00～19:00 懇 親 会 (会費2,000円) 会場 4 階「鶴の間」					
第二日 7月7日(木)	午前 9:30 パネル討論 2 マイクロビームの生物・ライフサイエンス研究への応用 p. 6	9:30 放射線効果(3) p. 7 10:45 放射線効果(4) p. 7	9:30 メスバウア効果(1) p. 8 10:45 メスバウア効果(2) p. 8	11:00 ポスター発表Ⅰ終了 11:30 ポスター発表Ⅱ開始 p. 14	9:00 機器展示開始
	午後 13:30 パネル討論 3 超低レベル放射能測定の実状と展望 p. 6 16:15 インフォーマルミーティング p. 7	13:00 放射線効果(5) p. 7 14:15 放射線効果(6) p. 8 15:15 地球科学(1) p. 8	13:15 メスバウア効果(3) p. 9 14:45 メスバウア効果(4) p. 9 15:45 トレーサ利用 p. 9	13:00 ポスター発表Ⅱ 責任時間 13:30	17:00 機器展示終了
第三日 7月8日(金)	午前 9:30 パネル討論 4 画像の重ね合わせによる病気の診断 p. 10	9:30 地球科学(2) p. 10 10:45 環境放射能(1) p. 11	9:30 放射線管理(1) p. 11 10:45 放射線管理(2) p. 11	11:00 ポスター発表Ⅱ終了	9:00 機器展示開始
	午後 13:30 特別講演 2 加速器の利用拡大を目指した小型加速器の開発の現状 p. 10 14:45 医学・獣医学への利用 p. 10	13:30 環境放射能(2) p. 11 15:00 環境放射能(3) p. 11	13:30 放射線利用機器(1) p. 12 14:30 放射線利用機器(2) p. 12 15:30 放射線教育 p. 12		13:00 機器展示終了

参加費2,000円(ただし学生は無料) 講演要旨集 1部4,000円(消費税含む)

名称が第41回までの「理工学における同位元素・放射線研究発表会」から変更されました。

東京

2005

大会ニュース (その3)

日本遺伝学会第77回大会案内

2005年の第77回大会は、国立オリンピック記念青少年総合センターを会場に、下記のような企画で準備を進めております。多くの方々の参加をお待ちしております。

大会ホームページ (<http://iden77.genes.nig.ac.jp>) では、より詳細な最新の情報をご覧いただけます。

第77回大会では学生の参加を歓迎するために、発表を行う学生の参加費は無料とし、学生の旅費援助も前回は引き続き行います。また、優れた発表に対してBP賞として表彰いたします。

1. 会場 国立オリンピック記念青少年総合センター

〒151-0052 東京都渋谷区代々木
神園町3番1号

2. 会期 2005年9月27日(火)、28日(水)、
29日(木)
なお、9月26日(月)に「遺伝学の
タペー市民公開講演会」の
開催を予定しております。

3. 企画 1) メインシンポジウム (9月27
日、午後1時半~午後3時半)
講演者と講演タイトル

①伊藤正男 (理化学研究所 脳
科学総合研究センター 前
所長) 演題未定

②Wen-Hsiung Li (米国シカゴ大学 教授)

“Evolution of gene expression in mammals and yeasts”

③John Mattick (豪州クイーンズランド大学 分子生命科学研究所 所長)

“The hidden layer of regulatory noncoding RNA in the genetic programming of complex organisms”

2) 一般講演 (9月27日午前中、28日午前中、29日午前中)

講演時間は1題につき12分(質問時間を含む)を予定しております。PCによる発表のみのため、USBフラッシュメモリーあるいはCD-ROMにデータを保存してお持ち下さい。会場備え付けのPC(Windows, Mac)を使用して頂きます。なお、ご都合の悪い方は前もって準備委員会事務局へ御連絡をお願いいたします。

3) 公開講演会

1. 公開科学講演会 “100 ways to crack the genome”(英語による) (9月28日、午後1時半~午後5時半)

①Mary Mullins (Univ. Pennsylvania, Dept. Cell Develop. Biol.)

“Maternal effects in vertebrate development”

②上田泰己 (Center for Developmental Biology, RIKEN)

“System-level identification of Mammalian Circadian Clocks”

③Pierre Gönczy (ISREC)

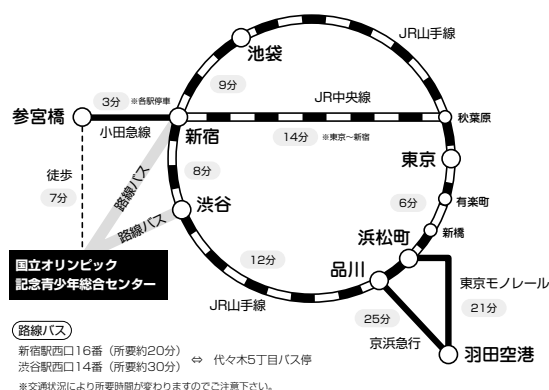
“Mechanisms of centrosome duplication in *C. elegans* and beyond”

④池村淑道 (Hayama Center for Advanced Research, SOKENDAI)

“Novel bioinformatics for unveiling hidden genome characteristics”

⑤Ruth Lehmann (Skirball Institute, HHMI)

“Navigating the embryo: germ cell migration in vivo”



2. 「遺伝学の夕べ ―市民公開講演会―」(日本語による)

(9月26日, 午後7時～午後9時)

講演者: 中村 桂子 ((株) JT 生命誌研究館 館長)

4) ミニシンポジウム (9月28日午後, 29日の午後)

現在, 以下の予定ですが, このうちいくつかのものは公開講演会にまわる可能性があります。
 テーマの末尾の(日本語)・(英語)は, そのミニシンポジウムで使われる言語です。

第2日の時間帯AとBは, 公開講演会(100 ways to crack the genome)と平行して行なわれます。

第2日(2005年9月28日, 水)

<時間帯A>13:30～15:30

・テーマ: 大腸菌の染色体ダイナミクス(日本語)

企画責任者: 堀内 嵩・片山 勉

講演者: 片山 勉, 真木寿治, 堀内 嵩, 平賀壮太, 仁木宏典, 足立 隼, 和地正明

・テーマ: 遺伝子発現からみた神経系の機能と進化(英語)

企画責任者: 池尾一穂・山本博章

講演者: 大久保公策, 山本博章, 池尾一穂, 峯田克彦

・テーマ: 行動遺伝学の最前線(日本語)

企画責任者: 小出 剛・山元大輔

講演者: 松尾隆嗣, 山元大輔, 和田由美子, 小出 剛, 服部栄治

<時間帯B>16:00～18:00

・テーマ: 染色体研究の新しい展開(日本語)

企画責任者: 村田 稔・福井希一

講演者: 村田 稔, 遠藤 隆, 福井希一, 牛木辰夫, 谷口研至

・テーマ: 自然選択と適応進化のメカニズムを探る(日本語)

企画責任者: 高橋 亮・印南秀樹

講演者: 猪股伸幸, 清水健太郎, 松岡由浩, 印南秀樹, 高橋 亮

・テーマ: 植物における生物時計と時計が関与する生命現象の分子機構(日本語)

企画責任者: 米田好文・石浦正寛

講演者: 長谷あきら, 小内 清, 小田 篤, 米田好文, 井澤 毅, 石川 亮

<時間帯C>19:00～21:00

・テーマ: ゲノム維持システム研究の最前線: DNA複製と修復の連携機構(日本語)

企画責任者: 松浦 彰・草野好司

講演者: 小林武彦, 菱田 卓, 三好知一郎, 草野好司, 松浦 彰

・テーマ: 生命情報学によるゲノム進化の解析(日本語)

企画責任者: 斎藤成也

講演者: 藤山秋佐夫, 三谷啓志, 岡村康司, 隅山健太

・テーマ: 高等植物の生殖システムの遺伝的多様性と分子機構(日本語)

企画責任者: 村井耕二・渡辺正夫

講演者: 村井耕二, 渡辺正夫, 平野博之, 鳥山欽哉, 東山哲也

・テーマ: 「遺伝」をプラスイメージに: 教育の重要性(日本語)

企画責任者: 武部 啓・池内達郎

講演者: 藤川和男, 米田好文, 池内達郎, 青野由利, 武部 啓

第3日(2005年9月29日, 木)

<時間帯A>13:30～15:30

・テーマ: 遺伝子からゲノム社会へ: 構築の原理を求めて(日本語)

企画責任者: 小林一三

講演者: 小林一三, 内山郁夫, 中谷明弘, 福田智行, 望月敦史, 中丸麻由子, 半田直史

・テーマ: 正の自然選択による分子進化(日本語)

企画責任者: 鈴木善幸

講演者: 大田竜也, 青木誠志郎, 長田直樹, 北野 誉, 鈴木善幸

・テーマ: 植物における種間交雑と倍数体化の遺伝学(英語)

企画責任者: 那須田周平・宅見薫雄

- 講演者：松岡由浩, Andreas Houben, 河邊 昭, 清水健太郎, 野村泰治, 持田恵一
 ・テーマ：神経遺伝学の現状と展望（英語）
 企画責任者：森 郁恵
 講演者：Michael Granato, 上村 匡, 竹内秀明, 久原 篤
 ・テーマ：Barcode of Life（日本語）
 企画責任者：菅原秀明

講演者：Barcode of Life 関係者, 伊藤元己, 田村 実, 松浦啓一, 斎藤成也

4. 総 会：国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟4階セミナーホール

9月27日16:30~17:30

受賞講演：国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟4階セミナーホール

9月27日17:30~18:30

5. 懇 親 会：国立オリンピック記念青少年総合センター 国際交流棟レセプションホール

9月27日19:30~21:00

6. 学生への旅費援助

学生会員の講演を奨励するために、発表する学生会員に旅費の一部（交通費実費程度）を援助いたします。所属研究室や日本学術振興会などから旅費支給が受けられる方はご遠慮ください。なお、大会全期間（9月27日~29日）参加を条件とします。希望される方は、1. 氏名, 2. 所属・学年, 3. 所属住所, 4. 旅費援助を必要とする理由, 5. メールアドレスをA4 1頁に記載し、指導教官のサイン・押印を貰った上で郵送にて下記の住所までお申し込み下さい。締切は7月28日といたします。

送付先：〒411-8540 三島市谷田1111 国立遺伝学研究所内 日本遺伝学会

TEL 055-981-6736/FAX 055-981-6736

7. Best Paper 賞：

昨年の大会と同様の要領で、大会発表の一般演題の中から優れた研究発表10件程度を選んで表彰いたします。

8. 参加・講演申し込み：

本大会では、参加申し込み・講演申し込みともに、大会ホームページ (<http://iden77.genes.nig.ac.jp/>) の参加申し込み・講演申し込みフォームから申し込んで頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。ここに詳細な情報は掲載していきます。講演申し込みの際には日本語要旨と英語要旨の両方を登録して頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

9. 講演要旨締め切り：2005年7月28日

10. 大会参加費・懇親会費：

大会ホームページ (<http://Iden77.genes.nig.ac.jp>) から参加申し込みを行い、参加受付番号を取得し、GGG Vol. 80 No. 1 に綴込みの払込票にて郵便局で払込みをお願いいたします。

その際、通信欄に、

- ・参加受付番号
- ・会費（一般・学生）と懇親会費（一般・学生）それぞれの金額と合計の金額
- ・学生の方は、指導教官の署名・捺印 をご記入下さい。

講演を予定されている学生会員の方は、参加費は無料ですが、懇親会に出席される場合は懇親会費のみお振込み下さい。

大会参加費 7月28日まで 一般 6,000円 学生 3,000円（講演者無料）

7月29日以降 一般 7,000円 学生 3,000円（講演者無料）

懇 親 会 費 7月28日まで 一般 6,000円 学生 3,000円

7月29日以降 一般 7,000円 学生 4,000円

11. 日本遺伝学会第77回大会準備委員会：

大会委員長 五條堀 孝

国立遺伝学研究所 生命情報・DDBJ 研究センター

〒411-8540 三島市谷田1111

TEL: 055-981-6847 FAX: 055-981-6848

E-mail: tgojbor@genes.nig.ac.jp

大会副委員長 館野 義男

国立遺伝学研究所 生命情報・DDBJ 研究センター

〒411-8540 三島市谷田1111

TEL: 055-981-6857 FAX: 055-981-6858

E-mail: ytateno@genes.nig.ac.jp



12. 連絡先:

準備委員会事務局 鈴木善幸・上田陽子(秘書)・室伏重樹子(秘書)

国立遺伝学研究所 生命情報・DDBJ 研究センター内

〒411-8540 三島市谷田1111

TEL: 055-981-6847 FAX: 055-981-6848

E-mail: iden7709@nig.ac.jp

日本遺伝学会 第77回大会 宿泊のご案内

平成17年9月27日(火)～9月29日(木)の3日間、国立オリンピック記念青少年総合センターにおきまして、上記学術集會が開催されます。

つきましては、全国各地より学術集會に参加されます皆様に特別料金で宿泊のご案内を申し上げます。

何卒ご利用賜りますようお願い申し上げます。

1. 宿泊のご案内

宿泊期間 平成17年9月26日(月)～29日(木)4泊(1泊朝食付・税金・サービス料込のお1人様あたりの料金です)

ホテル名	料金/シングル	最寄駅
セントラルホテル東京	¥ 8,925	JR 新宿駅下車徒歩1分
ホテルヴィンテージ新宿	¥10,185	〃 徒歩8分・私鉄西武新宿駅下車徒歩2分
スターホテル東京	¥11,550	〃 徒歩3分
新宿ワシントンホテル	¥11,550	〃 徒歩8分
新宿プリンスホテル	¥13,100	〃 徒歩4分
京王プラザホテル	¥17,850	〃 徒歩5分・大江戸線都庁前駅下車徒歩1分

2. お申込み方法

申込書にご記入の上、FAX 0557-82-6770 までお申込み下さい。

尚 開催2週間前になりましても回答がない場合は、通信エラーなどが考えられますので、お手数ですが当社までご連絡下さい。

宿泊代金につきましては、当社のご案内する期日までにお振込みにてお支払い下さい。(お振込み手数料は、お客様負担とさせていただきます。)

また、ご希望のホテルが満室の場合は、代案のホテルをご案内しますので、ご了承下さい。

ツインご希望の場合は、別途お問い合わせ下さい。

★ ご宿泊に関するお問い合わせは、下記にて承ります。

〒413-0011 静岡県熱海市田原本町9番1号 熱海第一ビル6階
東急観光(株) 熱海支店
TEL 0557-82-2238
FAX 0557-82-6770
E-MAIL: ATAMI@tokyu-tour.co.jp
担当: 奥五澤(よごさわ)・石田

3. お申込締切日 平成17年9月9日(金)

4. 取消料

取消及び変更される場合は早めにFAXにてご連絡下さい。

学術雑誌の電子アーカイブ事業（紹介）

国内学協会が学術雑誌の国際発信力の更なる強化と重要な知的財産の保存を目的とし、特に重要な学術雑誌について過去の紙媒体の論文に遡って電子化（電子アーカイブ）する事業を独立行政法人科学技術振興機構（JST）が実施することになり、第1回「電子アーカイブ対象誌選定委員会」（委員長：黒川清・日本学術会議会長）が5月31日に開催されました。

この電子アーカイブ事業は、日本の主要な学術雑誌を過去の創刊号から電子化し、JSTで運用している科学技術情報発信・流通総合システム（J-STAGE）において全文公開するもので、日本学術会議も協力することとなり、6月に電子アーカイブ対象候補誌基礎調査が実施されることとなりました。

関係の学協会にも、当該事業の推進への協力方についてお伝えいただきますようお願いします。

詳細につきましては、以下のJSTのホームページに掲載される予定です。

(<<http://info.jstage.jst.go.jp/jarchive>><http://info.jstage.jst.go.jp/jarchive>)

日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会の開催（報告）

6月1日（水）に第8回の日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会が開催され、「日本学術会議の新たな体制（要検討事項）」に基づく議論及び新体制移行期の暫定措置等について議論されました。

今後、懇談会では、6月20日（月）の第9回懇談会で最終報告書案について議論し、7月13日（水）の第10回懇談会で最終報告書を取りまとめることとしております。

懇談会の資料等は、ホームページに掲載しております。

(<<http://www.scj.go.jp/ja/scj/kondan/index.html>><http://www.scj.go.jp/ja/scj/kondan/index.html>)

日本地球惑星科学連合の設立について（記者発表用資料）

1. 発表日時 2005年5月25日（水）14:00～15:00
2. 発表場所 幕張メッセ国際会議場2階204号室
3. 発表タイトル 「日本地球惑星科学連合の設立について」
4. 発表者 連合評議会議長 廣田 勇（日本気象学会理事長）
運営会議議長 浜野洋三（東京大学教授）
運営会議副議長 木村 学（東京大学教授）
総務委員会委員長 中村正人（JAXA／宇宙科学研究本部教授）

5. 発表概要

これまで、我が国における地球惑星科学分野は多数（30以上）の学会に分かれて個別に活動を行ってきたため、他分野（日本物理学会や日本化学会など）のように国や社会に対する発言や情報発信、理科教育や科学技術政策に対する提言等が効果的にできないという、大変不幸な状況におかれました。このことが、我が国の中等教育における地学離れが加速した要因のひとつでもあり、科学技術政策において地球惑星科学が強力に推進される妨げになっている可能性も指摘されています。

一方で、1990年から、いくつかの地球物理学系の学会が集まり、毎年春の研究発表集会を合同で行う「地球惑星科学関連学会合同大会」を開催してきました。現在では、地質学・鉱物学・地理学分野まで含め、20学会を越える学会が参加するような大きな大会に発展してきました。学会間の連携をはかる基盤が築かれたともいえます。

そこで、この度、「日本地球惑星科学連合」という、地球惑星科学関連のほとんどの学会（発足時は24学会）が加盟する連合組織を設立することになりました。これは、地球物理学、地質学、鉱物学、地理学等に関する学会を網羅する、世界でも類を見ないような、地球や惑星を研究対象とする学会の総合的な連合組織です。

本組織は、我が国における地球惑星科学分野の意見集約や合意形成をはかると同時に、対外的な窓口組織として国や一般社会に対して提言や情報発信を行っていくことを意図しています。とくに、日本学術会議との連携や国際プロジェクト等への対応、我が国の科学技術政策への提言、初等・中等教育における地学教育や理科教育問題への対応、報道機関を通じた研究成果等の情報発信、一般市民を対象とした教育・啓蒙・アウトリーチ活動等を積極的に行っていきたいと考えています。

6. 発表内容

i) 正式名称

日本語名：日本地球惑星科学連合

英語名：Japanese Union of Earth and Planetary Sciences（略称：JUEPS）

ii) 日本地球惑星科学連合設立の経緯

日本学術会議がこの秋に改革されます。その改革に合わせ、これまで多数の分野に分かれていた地球惑星科学関連の学会をひとつに束ねた対外的窓口組織をつくるべきであるということが、地球物理学関連学会会長等懇談会で議論され、「地球惑星科学分野の窓口組織としてのユニオンを緊急に設立するべきである」ということが提言されました。

これを受け、地球物理学関連学会及び地質学・鉱物学関連学会が集まり、地球惑星科学分野の「連携の在り方に関する検討ワーキンググループ」が2004年6月に立ち上げられ、10月まで3回にわたって議論・検討が行われました。その結果、「地

地球惑星科学の総合的發展を目的とし、関連加盟学会の総意の下に創設される地球惑星科学の連携組織」(本組織の機能は下記項目iii)参照)を設立することで関連20学会の合意が得られました。

その後、“地球惑星科学連合設立準備会”が立ち上げられ、2004年10月から2005年5月まで5回にわたって連合の詳細に関する議論・検討が行われ、地理学分野までを含む24学会(会員数合計約37,000名)の合意のもとに、今回の連合設立に至りました。

連合は、2005年5月25日に行われた、学会長等の集まりである“拡大評議会”において承認され、正式に発足しました。

iii) 日本地球惑星科学連合の目的と機能

連合設立の目的は、「我が国の地球惑星科学コミュニティを代表し、国際連携及び社会への情報発信・教育、関連分野の研究発表、情報交換を通じて、学術の発展に寄与すること」(規約第2条)です。この目的を達成するために、連合は次のような「機能」(規約第3条)を持ちます。

- ・地球惑星科学コミュニティに対する国及び社会一般からの諸要請への対応
- ・地球惑星科学コミュニティの意見集約、対外的情報発信、教育及びアウトリーチ
- ・地球惑星科学に関わる国際学協会との連携及び国際プロジェクトへの対応
- ・地球惑星科学に関わる年次研究発表集会の開催及び国際会議等の企画・開催
- ・地球惑星科学コミュニティに共通する諸問題についての検討と提言
- ・その他、地球惑星科学の総合的發展を図るために必要な諸活動

iv) 日本地球惑星科学連合の構成

*評議会：加盟学会の長(学会長や理事長等)及び運営会議の議長及び副議長からなり、連合の運営方針について審議し、事業内容について監査する。

*運営会議：連合の事業を推進し、運営を統括する。運営会議の下に、運営の実務を行う常置委員会として、総務委員会、財務委員会、企画委員会、広報・アウトリーチ委員会、大会運営委員会、教育問題検討委員会、国際委員会の7つを置く。

*事務局：連合の運営全般に関わる事務を行う。

v) 日本地球惑星科学連合の具体的活動

連合では、今後、以下のような活動を行っていくことを検討しています。

- *地球惑星科学コミュニティにおける活動
 - 地球惑星科学コミュニティにおける諸問題の検討、意見調整・集約を行う
 - 国際学協会との連携及び国際プロジェクトへの対応を行う
 - 年次研究発表集会(連合大会)を実施する
 - シンポジウム、その他の研究発表集会を企画し運営する
 - ニュースレター誌等の発行を行う
- *国や一般社会に対する活動
 - 日本学術会議や総合科学技術会議に対する発言や提言を行う
 - 初等・中等教育における地学教育や理科教育に関する発言や提言を行う
 - 報道機関に対する広報活動を行う
 - インターネットを用いた地球惑星科学の啓蒙普及活動を行う
 - 一般向けの公開講演会を企画し実施する
 - 出前授業やマルチメディア授業などの教育活動を行う
 - その他、地球惑星科学に関する情報発信及びアウトリーチ活動を行う

7. 参 考 資 料

- ・連合発足時における加盟学会リスト
- ・連合メンバー及び事務局連絡先
- ・連合組織図

日本地球惑星科学連合発足時における加盟学会リスト

日本応用地質学会	資源地質学会	日本第四紀学会	日本地理学会
日本海洋学会	日本情報地質学会	日本地学教育学会	日本粘土学会
日本火山学会	日本地震学会	日本地下水学会	日本陸水学会
日本岩石鉱物鉱床学会	日本水文科学会	日本地球化学会	日本惑星科学会
日本気象学会	水文・水資源学会	地球電磁気・	(「日本」を除く50音順)
日本鉱物学会	日本雪氷学会	地球惑星圏学会	
日本古生物学会	日本測地学会	日本地質学会	* 2005年5月25日現在24学会が加盟

日本地球惑星科学連合メンバー及び事務局連絡先

●評議会

議長：廣田 勇(日本気象学会理事長・京都大学名誉教授)

●運営会議及び委員会責任者

議長：浜野洋三(東京大学教授)

副議長：木村 学(東京大学教授)

・総務委員会

委員長：中村正人(JAXA/宇宙科学研究本部教授)

副委員長：吉田武義(東北大学教授)

- ・財務委員会
 - 委員長：川幡穂高（産業技術総合研究所主任研究員）
 - 副委員長：小原隆博（情報通信研究機構・電磁波計測部門グループ長）
- ・企画委員会
 - 委員長：大村善治（京都大学生存圏研究所教授）
 - 副委員長：吉田真吾（東京大学地震研究所助教授）
- ・広報・アウトリーチ委員会
 - 委員長：田近英一（東京大学助教授）
 - 副委員長：原 辰彦（建築研究所主任研究員）
- ・大会運営委員会
 - 委員長：津田敏隆（京都大学生存圏研究所教授）
 - 副委員長：高橋幸弘（東北大学講師）
- ・地学教育問題検討委員会
 - <委員長，副委員長は未定>
- ・国際委員会
 - <委員長，副委員長は未定>
- 連合事務局及び連絡先
 - 事務局長：岩上直幹（東京大学助教授）
 - チーフ：谷上美穂子
 - 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学理学部1号館719号室
 - TEL：03-5841-4291 FAX：03-5800-6839
 - Email：office@epsu.jp

日本学術会議レポート ③

G8 サミットに向けた各国学術会議の共同声明

平成17年6月8日

日本学術会議会員 各位

日本学術会議事務局総務部庶務課長

本日16時30分、岸輝雄日本学術会議会長代理（黒川会長は海外出張中）から小泉内閣総理大臣に対して、G8 サミットに向けた各国学術会議の共同声明（「環境問題」、「アフリカ開発」）を手交いたしました。

また、黒川日本学術会議会長のコメントが発出されましたので併せてお知らせいたします。

詳細につきましては、日本学術会議のホームページを御覧ください。

(<<http://www.scj.go.jp/ja/info/comment/050608.html>>)

G8 サミットに向けた各国学術会議の共同声明

平成17年6月8日

日本学術会議

各国の学術会議は、1990年代より連携をとりつつ、科学的知見を要する世界的課題に対し、提言する活動を活発化させてきた。この共同声明は、G8 各国の学術会議が中心となって、本年7月6日から8日に英国のグレンイーグルズで開催される G8 サミットに対し、サミットの議題に沿った環境問題とアフリカ開発に関する科学者の意見をインプットすることを主目的とし、6月8日に発表された。

①「気候変動に対する世界的対応に関する各国学術会議の共同声明」

G8 各国+ブラジル、中国、インドの学術会議

- ・気候変動の脅威を認識し、科学的根拠のある削減目標を策定すること。
- ・実施可能で費用対効果の高い方策を策定するとともに、開発途上国が解決策を自ら生み出せるよう協力すること。
- ・クリーン・エネルギー技術の開発と普及及び資源管理に対する指導性を発揮し、これらの知識を世界中の国々と共有すること。

②「アフリカ開発のための科学技術に関する各国学術会議の共同声明」

G8 各国+アフリカ各国の学術会議ネットワーク（カメルーン、ガーナ、ケニア、マダガスカル、ナイジェリア、セネガル、ウガンダ、南アフリカの8カ国の学術会議とアフリカ科学アカデミーが加盟）

- ・アフリカの開発と持続可能な開発のためには、科学技術と技術革新が不可欠であることを認識し、それらの能力開発プログラムを積極的に盛り込むこと。
- ・アフリカ諸国は、自ら問題を解決する能力を身につけるため自国の科学能力への投資、環境整備等が不可欠であることを認識し、最先端の科学技術と技術革新の交流及び共有を促進すること。
- ・G8 サミットで本件を引き続き議題にすること。

平成17年 6 月 8 日

会長コメント

日本学術会議は、本年 7 月 6 日から 8 日に英国のグレンイーグルズで開催される G8 サミットに向け、G8 主要先進各国の学術会議及び関係諸国の学術会議と共同で 2 つの声明「気候変動に対する世界的対応」及び「アフリカ開発のための科学技術」を 6 月 8 日に発表し、同日、小泉総理に声明を手交した。

日本学術会議は従来より各国学術会議と共同して国際的な提言等を発信してきたが、この声明は、本年の G8 サミットの議題である環境問題とアフリカ開発について各国科学者の意見を集約したものである点において非常に戦略的かつ重要な声明である。更に、G8 主要先進国のすべての国と G8 以外の大国であるブラジル、中国、インド、及びアフリカ諸国の学術会議が共同して G8 サミットに向けた声明を出すのは初めてのことであり、画期的な出来事である。

この 2 つの声明において、我々は G8 各国首脳をはじめ世界の指導者に対してこれらの課題に対する取り組みについて次のように訴えている。

「気候変動に対する世界的対応」

- ・気候変動の脅威を認識し、科学的根拠のある削減目標を策定するための国際的研究に着手すること。
- ・実施可能で費用対効果の高い方策を策定するとともに、開発途上国が解決策を自ら生み出せるよう協力すること。
- ・クリーン・エネルギー技術の開発と普及に対する指導性を発揮して、これらの知識を世界中の国々と共有すること。

「アフリカ開発のための科学技術」

- ・アフリカの開発と持続可能な開発のためには科学技術と技術革新が不可欠であることを認識し、それらの能力開発プログラムを積極的に盛り込むこと。
- ・アフリカ諸国が自ら問題を解決できるようにするため、自国の科学能力への投資や環境整備、教育への配慮等が不可欠であることを認識し、最先端の科学技術と技術革新の交流及び共有を促進すること。
- ・G8 サミットで本件を引き続き議題とすること。

日本学術会議は、今後とも各国学術会議と緊密に連携し、国内外の科学者や学術研究団体と協力しながら、地球的規模の諸課題の解決に積極的に貢献してまいりたい。

日本学術会議会長 黒川 清

日本学術会議レポート 4

平成17年 4 月 28 日

日本学術会議
黒川 清 会長 殿

第 4 部長
郷 信広

「日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会」提出資料

はじめに

第 4 部は 4 月 18, 19, 20 日に開かれた部会において、「日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会」の「中間まとめ」についての検討を行い、その結果の主要な点については、20 日に開かれた総会自由討議において部長から報告しました。戒能副会長から、発言を文書で懇親会に提出するように指示いただきましたので、ここに資料として提出します。

1. 国際学術団体対応委員会と学問分野別を基本とする委員会との関係について

「中間まとめ」においては、新しい日本学術会議は様々な国際学術交流を進展させて行こうとする中で、国際学術団体の国内委員会としての役割を従来担ってきた研究連絡委員会・専門委員会等の機能については、新体制下においてもその必要性に変化はないと考えられるとした上で、「国際交流統括委員会」の下に「団体加入分科会」を設置し、その下に、各国際学術団体に対応する「対応委員会」を設置して、国内委員会としての役割を担わせることとするとしています。

「中間まとめ」は、新学術会議と学術研究団体との連携の在りかたに関して、「緊密な連携を図り、国内外の社会の要請に応えるために協力・協働することができるよう、そのあり方を再構築する必要がある」としています。この関係は学術分野別の国際交流と、学術分野を越えた国際交流との間にも、同様に要請されています。

今まで第 4 部関係の多くの研究連絡委員会や専門委員会は、国際学術団体の国内対応委員会としての役割も担って活動してきましたので、第 4 部は新体制下において国際学術団体の国内対応機能がどのような組織によって担われることになるのかに重大な関心を持っています。

学術会議が担うべき国際学術交流には、従来研究連絡委員会や専門委員会が国内対応委員会として機能してきた学術分野別の交流と、学術分野を越えた交流とがありますが、後者は通常の外交との類似で言えば、外務省や外交官が行う外交に対応し、前者は民間外交に対応していると思います。

新しい学術会議が後者の交流、すなわち学術分野を越えた交流を強化し、国際社会において、わが国の科学者コミュニティが総体としての寄与と存在感を高めようとしていることは適切であり、第4部も強く支持するものです。

しかし、前者の交流、すなわち学術分野別の交流はこれとは異なり、個々の分野における研究者の日常的な協力を基盤とし、研究の現場に密着したものです。日本学術会議の研究連絡委員会は、研究者コミュニティを代表して、この交流の要の役割を果たしてきました。たとえば、国際的な共同研究の企画立案と協議の窓口となり、国際会議が日本で開かれる場合には、多くの場合、国際対応委員会として機能してきました。国際会議の組織・運営において、日本学術会議の研究連絡委員会等に、関連の国内学協会がはせ参じて、実働部隊として献身的に働き、この活動を通して、日本学術会議を自分達の組織として身近に感じてきたことも見逃せません。

学術分野別の国際交流と民間外交との対応は、上では類似として述べましたが、より直接に研究者間の交流が民間外交としての機能を持っていることも指摘しておく必要があると思います。政治的な関係が困難な国の間でも、特定の分野の研究者間の研究を通じた交流が維持されることにより、国の間を結ぶ糸の一つとして機能した例は、冷戦下の東西研究者交流や、現在わが国が中心的な役割を果たし、イスラエルも参加してヨルダンで進められている放射光加速器建設のSESAME計画等、少なくありません。これらの活動がそれぞれの分野における国際協力の延長線上にあることは云うまでもありません。

「中間まとめ」では、学術分野別を基本とする委員会、およびその下の「小委員会」が言及されていますが、現在順調に遂行されている研究連絡委員会あるいは専門委員会の国際学術団体対応機能は、新しくできる学術分野別委員会（あるいはその下の「専門委員会」または「小委員会」）が引き継ぐのが適当だと思います。原案では国際交流統括委員会の下に「団体加入分科会」を設置し、その下に、各国際学術団体に対応する「対応委員会」と設置するとされていますが、この「対応委員会」は、実質上、学術分野別委員会あるいはその下の「小委員会」が対応すると考え、これらの委員会の国際対応機能が、「団体加入分科会」の所掌に属すると理解するのが適当と考えます。分野別の国際対応は当該分野の研究活動の一環ですから、それだけを担当する委員会を設けるのは、実情にそぐわないと思います。

2. 学問分野別を基本とする委員会の審議内容の明確化について

「中間まとめ」では、この点に関して、「各委員会が審議すべき内容の範囲を明確に定め、各種審議課題に迅速・的確に対応できるようにする」とされています。後半の「迅速・的確」は当然ですが、前半の「学問分野別委員会の審議すべき内容の範囲を明確に定める」ことは、学術研究のあり方としては最も危険なことだと思います。会員および連携会員は一応「学問分野別を基本とする委員会」に分属することになるのですが、各個人、委員会とも常に狭い学問分野にとらわれない問題意識を持ち続ける必要があると思います。

日本学術会議レポート 5

日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会（05/06/20）配布資料から

この表は、標記懇談会にて配布された資料から抜粋されたもので、新体制に置かれる常置委員会の一つ、分野別委員会の構成を示したものである。現在の研連数178を大括り化し30前後とする案。

各委員会には会員、連携会員が各部から推薦され会長が委嘱する。生物学分野に注目。

なお、学術会議が新体制において、どのように学術研究団体と連携・協力を図るかについての検討事項も同資料に記載されている。学術会議ホームページ参照。

〈設置すべき分野別委員会（生命科学系）〉

分野別委員会（案）	第19期研究連絡委員会（領域別）	第19期研究連絡委員会（課題別）
基礎生物学委員会	動物科学、植物科学、細胞生物学、遺伝学、分子生物学	生物科学、遺伝資源
応用生物学委員会	生態・環境生物学、人類学・民族学、生物工学	古生物学、生体機能応用技術、生物物理学、ゲノム科学
農学基礎委員会	農学、植物防疫、育種学、蚕糸学、栄養・食糧科学、発酵学・農産物利用学、地域農学、農業総合科学、微生物学、農業経済学、農業土木学、農業機械学、農業環境工学、農村計画学	
生産農学委員会	水産学、畜産学、獣医学、土壌・肥料・植物栄養、木材学、林学、森林工学	海水科学
基礎医学委員会	解剖学、生理学、生化学、薬理学、病理学、遺伝医学、免疫・感染症、癌・老化	実験動物
臨床医学委員会	脳・神経学、循環器学、消化器学、内分泌学、血液学、病態代謝学、精神医学、医療技術開発学、呼吸器学、感覚器医学、泌尿・生殖医学、身体機能回復医学、緊急・麻酔・集中治療医学、出生・発達障害	

- (2) 木原賞副賞をいったん木原賞基金から学会に収入として入金し、それを受賞者に支出する形とする。(金額の詳細はここでは省略)
- (3) 事務局にある GGS のバックナンバーの数を減らしたい。具体的な数字は、今後に検討し決定する。
- (1)～(3) について質疑応答をへて、原案通り承認された。なお、今後の会計の取り扱いについては、必要に応じて会計士等に相談する事も考えてみてはどうか、との発言が評議員よりあった。

編集幹事 (品川・遠藤) : 先ず品川前編集幹事から資料 1 の通り報告があった。

- (1) 論文投稿状況, (2) 英文要旨について, (3) 新旧編集長の引き継ぎについて, (4) GGS 論文賞の選考について。

引き続いて遠藤新幹事 (編集長) の挨拶があった (資料 2)。GGS 論文賞の選考方法についての追加説明, GGS 表紙の体裁を来年度から新しくする計画のあること, 現在は編集委員・編集顧問の任期が明確ではないので今後委嘱の在り方を検討したい, など。これに対して, 「当該号に掲載された論文の図や写真を表紙に出すというのは, 論文投稿の励みにもなるので考えてみてはどうか」との提言が評議員よりあった。

城石企画・集会幹事

- (1) 第79回 (2007年) 大会を中国地区とくに岡山大学 (含む香川大学) でお世話いただけるかどうか話をはじめていると説明。これを受けて村田評議員が持ち帰って関係会員 (香川, 村田, 杵掛, 上田, 竹崎氏ら) と相談したい旨の発言があった。
- 今秋の評議員会の議をへて, 総会にて決定。なお, 第80回 (2008年) 大会については, 名古屋地区, 神戸大学, その他の可能性を検討している。来春の評議員会までに名乗りをあげていただきたい。
- (2) ベストペーパーズ賞: 前任者 (河野評議員) とあまり話す時間がないが, 田嶋幹事とも機会を見て早々に話し合う。大会予稿集には, 今年度の選考について明記出来るようにしたい。原則として昨年通り。

生物科学学会連合報告 城石委員

- (1) 実験動物の輸入に関する新規の法律について議論した (GSJ コミュニケーションズ80(1) に記載のとおり)。
- (2) J-STAGE に新しい予算がつき, 各学会誌への配分が検討される。GGS がどれだけカバーしてもらえるか。(生物系の雑誌については動物学会事務局が取りまとめ中)。なお, 学術会議ニュース・メール #34の一部 (前出26頁) 参照。

福井渉外庶務幹事: 国際遺伝学会議の日本への招聘について, 実際に進めるかどうかについてご意見を伺いたい。資料 3 にまとめて記載。質疑応答の結果, 招聘の方向でさらに継続して検討し, 必要に応じてメールにより評議員に諮ることとした。

五條堀大会委員長: 第77回大会は, 国立オリンピック記念青少年総合センターを会場に, 9月27日から三日間の会期で, 特に若手研究者にとって魅力的な企画の準備を進めている。多くの方の参加をお待ちしている。配布資料と同じ大会ニュース (その二) は, GSJ コミュニケーションズ80(1) に記載されている。より詳細な内容は, 大会ホームページ (<http://iden77.genes.nig.ac.jp>) をご覧下さい。

石和議長: これで本日予定しておりました議題は, 終了しました。長時間ご協力有り難うございます。これにて散開します。第2回評議員会は, 大会前日の9月26日に予定されております。おわりに, 皆様の研究の発展と健康を祈ります。

資料 1

1. 2004年度の投稿論文数は前年度よりかなり増加した。電子投稿を受け付けるようにしたためで, 特に海外からの投稿が増えた。しかし, 海外からの投稿論文には学術的レベルの低いものもあって, 編集委員には注意深く審査して, GGS の論文の質を維持するようにお願いした。

Gene & Genetic Systems の発行状況						論文投稿状況		
巻・号	論文数	総説	原著	短編	その他	年 度	2004年度	2003年度
79巻・1号	7		5	1	1	投稿論文数	63	55
79巻・2号	7	1	4	1	1	採 択	32	27
79巻・3号	7		6	1		不 採 択	16	12
79巻・4号	8		6	2		校 閲 中	15	16
79巻・5号	7		5	2		採 択 率	67%	69%
79巻・6号	6		5	1				

2. 大会の発表要旨の提出は前年度までは, 和文だけを前もって提出し, 英文要旨は発表当日に座長に提出してもらっていた。今年度は発表申込時に和文と英文の両方の要旨を Umin を通じて電子投稿してもらうようにした。英文要旨は例年の如く GGS

No. 6 に巻末に集録したが、電子化されていたので、編集事務局の作業が大幅に削減された。これ迄英文要旨は番号順に並べただけであったが、今年度からプログラムに沿って英訳の見出しをつけて見易く整理した。

3. 新編集幹事である遠藤隆先生（京大）と編集業務の引き継ぎの話し合いを2004年12月14日に阪大で行った。品川が Vol. 80（2005年度）No. 1 までの編集を担当して引き継ぐことになった。GGsの表紙は遠藤先生と相談の結果、前年度と同じ図案で、Vo. 80 No. 1 から濃紺に変更する予定である。

4. GGS Prize を本年度から選定して授与する。2004年度の発表論文の中から選定するために、編集委員・編集顧問に候補論文2報以内を5月31日までに編集幹事あてに推薦していただく。編集幹事は推薦を受けた論文を編集委員全員に知らせ、編集委員は候補論文を読んで評価する。推薦者は編集委員会で推薦理由を説明し、討議した後、採否を多数決で決定する。

（GGs 前編集長 品川日出夫）

資料2 編集長から遺伝学会会員の皆様へ

2005年度のGGs編集は以下のような体制で臨むことになりました。引継ぎで、私の心の準備ができていなかったこともあり、消極的ではありましたが、編集委員・編集顧問は、前年度の委員で、E-mail又は文書で連絡がとれ（配達不能通知が来なかった）、“不承知”との返事が無かった方に委嘱いたしました。海外出張等で、私からのe-mail（2月22日）をご覧になっておられない方も、一方的で恐縮ではありますが、引き続きお引き受けくださるようお願い申し上げます。来年度からは、編集委員・編集顧問の委嘱を、今回のような消極的な形ではなく、任期や本人の意思を明確にする形を考えております。

前号のGSJ コミュニケーションズ（79（6）、13頁）でもお知らせいたしましたように、本年度より前年度GGs掲載論文（Vol. 79: No. 1～No. 6）の中から優秀なものを選んでGGs PRIZEを授与することとなっております。編集委員・編集顧問がそれぞれ候補論文を編集長に推薦し、編集委員会で討議して決定することとなっております。推薦の閉切りは5月31日であることを再度お知らせいたします。

GGsは迅速な編集を旨とし、優れた研究はもちろんですが、将来の優れた研究につながる事が期待できる萌芽的な研究も積極的に掲載できればと思っております。なお、GGsは今年で第80巻になり、表紙の色を紺色といたしました。2006年はくぎりのよい第81巻となり、表紙の色も7色を一巡しましたので、表紙の体裁を新しくすることを編集委員会で検討したいと存じております。GGsをより魅力ある学会誌にするために、遺伝学会員皆様のご支援、ご協力を宜しくお願い申し上げます。

GGs 編集長
遠藤 隆

資料3 国際遺伝学会議の我が国における開催について

石和会長より標記学会の我が国における開催の可能性について検討依頼があり、五條堀会員、館野会員との意見交換に基づき以下の原案を取りまとめた。

1. 国際遺伝学会議を我が国にて開催するよう積極的な検討を進め、本年末を目処として開催に関する成案を得る。
2. 開催に当たっては遺伝学関連学会連合（仮称）を設立し、これを母体として準備会を来年早々に立ち上げる。それに先立ち遺伝学会内で3、4名のWGを作る。
3. 現時点で想定しうる事項
 - ・開催時期：2008年7月ベルリン大会の次の開催を想定する。したがって2013年8月頃を想定。
 - ・開催場所：国際空港からのアクセスが便利なところ。東京か近畿圏。
 - ・参加人数：3,000名（メルボルン大会と同等）を予定。うち国内参加者を1,500名と見積もる。
 - ・予算：2億円（メルボルン大会 3億円、10万/人）を予定。参加費を4万円とすると、8,000万円の寄付を募る必要がある。
 - ・遺伝学関連学会連合：遺伝学会、人類遺伝学会、変異原学会、染色体学会、分子生物学会、その他関係学会。
4. スケジュール
 - ・05年4月：遺伝学会、幹事会・評議会での開催案の承認
 - ・05年5月：国際遺伝学会長（Prof. Jan Drake）とのコンタクトの開始
 - ・9月：可能性の内諾、遺伝学会内でのWGの立ち上げ、検討開始、他学会への働きかけ。
 - ・12月：国際遺伝学会議の実施要項の取りまとめ、各国遺伝学会への働きかけの開始。
 - ・06年4月：遺伝学会、幹事会・評議会での実施要綱の承認

（渉外庶務幹事 福井希一）

◆「遺伝学の教育と普及に関する特別委員会」武部委員長から委員候補への手紙◆

謹啓：梅雨の候ですが、ご清祥のこととお慶び申し上げます。

日本遺伝学会は、石和貞男会長の提案により、本年度「遺伝学の教育と普及に関する特別委員会」を設置しました。昨年度日本

学術会議の委員会において、私がこの課題で提言していたことから、私に委員長をつとめるよう依頼を受けました。日本遺伝学会はこれまでも中等教育（中学校、高等学校）における遺伝学の教育について、検討し、提言してきました。しかしながら文部科学省のいわゆる「ゆとり教育」方針に基づく学習指導要領の改定により、現在は理科（中学）、生物（高校）教科書における遺伝学はきわめて乏しいものとなっています（高校学習指導要領の写しを添付します）。

一方、一般市民の生活や文化においては、組換え DNA 農作物、ヒトゲノム解析とそれに基づくオーダーメイド医療など、遺伝学を背景とした話題への理解が不可欠の時代を迎えています。私は、高等学校、できれば義務教育の中学校の段階で、これらの問題の基礎的な理解のための遺伝学の教育の充実が必要であると確信しています。それには、まず本学会において、現状を理解し、どのような内容をどのように教育することが望まれるかを検討することから着手したいと考えています。

それに加えて、私は一般市民への「遺伝」についての理解を深める働きかけも重視したいと考えます。その理由のひとつとして、一般市民向けの出版物（雑誌記事やコミックなどを含む）には「遺伝子」と「DNA」は数多く見えるのに、「遺伝」という言葉は科学的な解説に限られていることを指摘したいと思います。一般市民にとって「遺伝」は暗いイメージ、極端な表現に聞こえるかもしれませんが、呪われたようなイメージを伴う言葉のようです。それを打破するには、マスメディアの理解と協力が不可欠です。本委員会にはマスメディアからも参加いただいて、研究者、教育者との協力によって、一般市民への遺伝学の普及のありかたを検討したいと希望しています。

委員会は当初遺伝学の各分野、とマスメディアから数人の委員で構成し、主にメールを通じての意見交換を進め、学会大会の機会などに会合するかたちで運営したいと計画しています。委員は、学会員からは原則としていわゆる現役で研究、教育の第一線におられる方にお願いします。専門分野をある程度考慮していますが、それにこだわらず自由なご意見をいただきたいと希望します。あなたにこの委員会にぜひご参加いただきたく、お忙しい日常とは存じますが、よろしく願い申し上げます。委員就任をお願いする方につきましては石和学会長からのご推奨あるいはご同意をいただいていますことを申し添えます。

敬 具

日本遺伝学会

遺伝学の教育と普及に関する特別委員会

委員長 武部 啓（近畿大学）

2005年6月14日

◆会 員 異 動◆

新入会・再入会

升 方 久 夫	560-0043	大阪府豊中市待兼山町1-1 大阪大学大学院理学研究科
菅 原 秀 明	411-8540	静岡県三島市谷田1111 生命情報・DBJ 研究センター
石 橋 みなか	411-8540	静岡県三島市谷田1111 総合研究大学院大学

住 所 変 更

郷 通 子	112-8610	文京区大塚2-1-1 お茶の水女子大学
塩 生 真 史	526-0829	滋賀県長浜市田村町1266番地 長浜バイオ大学バイオサイエンス学部
川 村 暢 幸	610-039	京都府京田辺市興戸 同志社女子大学薬学部生化学研究室
北 野 誉	990-9585	山形県山形市飯田西2-2-2 山形大学医学部環境病態統御学講座法医病態診断学分野
渡 辺 正 夫	980-8577	宮城県仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学大学院生命科学研究科植物生殖遺伝分野
山 元 大 輔	980-8578	宮城県仙台市青葉区荒巻 東北大学大学院生命科学研究科 脳機能遺伝分野
大 貝 悠 一	415-0025	静岡県下田市 5 丁目10-1 筑波大学下田臨海実験センター (京都大学大学院 理学研究科 動物学教室 発生ゲノム科学研究室 博士課程)

楠 田 潤	567-0085	大阪府茨木市彩都あさぎ7-6-8 独立行政法人 医薬基盤研究所 生物資源研究部 遺伝子バンク
浦 崎 明 宏	411-8540	静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所 初期発生研究部門
鈴 木 浩 文	191-0012	東京都日野市日野5979-1サニーホームズ 1-202
竹 崎 直 子	761-0793	香川県木田郡三木町大字池戸1750-1 香川大学総合情報基盤センター
佐々木 剛	569-1125	大阪府高槻市紫町1-1 JT生命誌研究館
鈴 木 智 広	305-0074	茨城県つくば市高野台3丁目1番地の1 RIKEN-GSC ゲノム機能情報研究グループ 動物ゲノム変異開発研究チーム
広 津 崇 亮	812-8581	福岡県福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学大学院理学研究院生物科学部門分子遺伝学研究室
加 藤 和 貴	611-0011	京都府宇治市五ヶ庄 京都大学化学研究所バイオインフォマティクスセンター
光 澤 浩	252-8510	神奈川県藤沢市亀井野1866 日本大学生物資源科学部 応用生物科学科 核酸科学研究室
木 村 直 美	411-8540	静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所 人類遺伝研究部門
佐 野 彰 紀	830-0011	福岡県久留米市旭町67番地 久留米大学医学部 法医学・人類遺伝学講座
大 島 靖 美	860-0082	熊本市池田4-22-1 崇城大学・生物生命学部・応用生命科学科
井 上 麻 紀	305-0074	茨城県つくば市高野台3-1-1 理化学研究所ゲノム科学総合研究センター ゲノム機能情報研究グループ 動物ゲノム変異探索研究チーム

退 会

白戸一士, 宮良晶子, 池田秀雄, 伊達宗良, 森川博史, 難波紀子, 柴田竜也, 刈茅 茂, 宮部 泉, 小林 孝, 新井宏和, 徐 建紅, 加藤 徹, 鎌田芳彰, 大河内善佐, 佐々木顕, 井野麻美, 石井直明, 荒野久男, 石川佐滋, CHOOWONG AUESUKAREE, 濱田光浩, 中西真里, 松原茂治, 三浦大典, 前田利夫, 高橋 進

休 会

愿山 郁

寄贈図書・交換図書

科学	Vol. 75 No. 4~6 (2005)
人と自然	Vol. 15 (2005)
Journal of Applied Genetics	Vol. 45 No. 2, 3 (2004)
Journal of Applied Genetics	Vol. 46 No. 1 (2005)
Revista de SALUD ANIMAL	Vol. 26 No. 3 (2004)
CHINESE QINGHAI JOURNAL OF ANIMAL AND VETERINARY SCIENCES	Vol. 35 No. 1, 2 (2005)
ChineseJournal of APPLIED & ENVIRONMENTAL BIOLOGY	Vol. 11 No. 1 (2005)
PROCEEDING OF THE INDIAN NATIONAL SCIENCE ACADEMY	No. 2 (2004)
THE YEAR BOOK	(2005)

(鈴木真有美)

大会は年輪を重ね、叢知はつどい、新しい遺伝学は芽吹く

(日本遺伝学会大会暦年表)

回	年	月	日	会 場	回	年	月	日	会 場
1	1928(昭3)	10月	19日	九州帝国大学農学部	40	1968(昭43)	10月	7～9日	広島大学教養部・政経学部
2	1929(昭4)	7月	26日	北海道帝国大学農学部	41	1969(昭44)	10月	10～12日	金沢大学工学部
3	1930(昭5)	10月	31日	東京農事試験場	42	1970(昭45)	10月	5～7日	東京女子大学短期大学部
4	1931(昭6)	10月	31日	京都帝国大学・楽友会館	43	1971(昭46)	10月	20～22日	九州大学理学部・農学部
5	1932(昭7)	10月	14日	名古屋医科大学	44	1972(昭47)	10月	7～9日	岡山大学理学部・法文学部
6	1933(昭8)	10月	26日	広島文理科大学 動物学教室	45	1973(昭48)	10月	14～16日	名古屋大学農学部
7	1934(昭9)	12月	21日	台北帝国大学 生物学教室	46	1974(昭49)	9月	10～12日	福祉会館(仙台)
8	1935(昭10)	10月	21日	金沢医科大学 法医学教室	47	1975(昭50)	10月	3～5日	日本大学三島校舎
9	1936(昭11)	10月	16日	岡山医科大学 生理学教室	48	1976(昭51)	10月	28～30日	日本生命中之島研究所(大阪)
10	1937(昭12)	7月	31日	北海道帝国大学理学部	49	1977(昭52)	9月	28～30日	北海道経済センター(札幌)
11	1938(昭13)	10月	13～15日	九州帝国大学農学部・医学部・九州小麦試験地	50	1978(昭53)	10月	8～10日	東京農業大学
12	1939(昭14)	10月	14～15日	科学博物館(東京)	51	1979(昭54)	10月	11～13日	京都大学農学部
13	1940(昭15)	8月	27～28日	京城帝国大学医学部	52	1980(昭55)	10月	6～8日	富山大学教養部
14	1941(昭16)	地方談話会大会 (6会場)		(総会予定地は仙台)	53	1981(昭56)	10月	12～14日	広島大学総合科学部
15	1942(昭17)	10月	27～28日	東北帝国大学 農学研究部	54	1982(昭57)	11月	19～21日	九州大学医学部
16	1943(昭18)	10月	20～21日	京都帝国大学・楽友会館	55	1983(昭58)	10月	8～10日	東北大学教養部
17	1944(昭19)	地方談話会大会 (7会場)		(総会予定地は名古屋)	56	1984(昭59)	11月	23～25日	日本大学国際関係学部
18	1946(昭21)	11月	18～19日	静岡高等学校	57	1985(昭60)	10月	13～15日	神戸大学農学部・理学部・自然科学系
19	1947(昭22)	10月	21～22日	松本高等学校	58	1986(昭61)	12月	4～7日	名古屋観光ホテル
20	1948(昭23)	10月	23～24日	高野山	59	1987(昭62)	10月	29～30日	筑波大学生物科学系
21	1949(昭24)	10月	20～22日	名古屋大学理学部	60	1988(昭63)	10月	8～10日	京都大学農学部
22	1950(昭25)	10月	14～16日	東京大学医学部	61	1989(平元)	10月	13～15日	北海道大学学術交流会館
23	1951(昭26)	10月	11～12日	広島大学教養部	62	1990(平2)	10月	4～6日	お茶の水女子大学
24	1952(昭27)	10月	8～10日	新潟大学医学部	63	1991(平3)	10月	16～18日	九州大学箱崎キャンパス
25	1953(昭28)	11月	7～8日	国立遺伝学研究所	64	1992(平4)	10月	22～24日	仙台国際センター
26	1954(昭29)	10月	28～30日	京都大学医学部	65	1993(平5)	9月	17～19日	日本大学国際関係学部
27	1955(昭30)	10月	16～18日	岡山大学	66	1994(平6)	10月	8～10日	大阪大学医学部講義棟
28	1956(昭31)	10月	6～8日	富山市公会堂	67	1995(平7)	10月	12～14日	岡山大学一般教育講義
29	1957(昭32)	9月	3～5日	北海道大学農学部	68	1996(平8)	10月	3～5日	名古屋・椋山女学園大学
30	1958(昭33)	10月	16～19日	名古屋大学医学部	69	1997(平9)	11月	1～3日	横浜市立大学瀬戸キャンパス
31	1959(昭34)	11月	4～7日	大阪大学医学部	70	1998(平10)	9月	23～25日	北海道大学学術交流会館
32	1960(昭35)	10月30日～ 11月1日		九州大学工学部	71	1999(平11)	9月	24～26日	広島大学理学部・法学部・経済学部
33	1961(昭36)	9月	1～3日	東北大学川内分校	72	2000(平12)	11月	3～5日	京都大学農学部・京都府会館会議場
34	1962(昭37)	10月	17～18日	日本大学文理学部三島校舎	73	2001(平13)	9月	22～24日	お茶の水女子大学
35	1963(昭38)	10月	8～10日	東京大学教養学部	74	2002(平14)	10月	1～3日	九州大学箱崎キャンパス
36	1964(昭39)	10月	18～20日	愛媛大学	75	2003(平15)	9月	24～26日	東北大学川内キャンパス
37	1965(昭40)	10月	18～20日	京都大学医学部・楽友会館	76	2004(平16)	9月	27～29日	大阪大学コンベンションホール
38	1966(昭41)	8月	10～12日	北海道大学教養部	77	2005(平17)	9月	27～29日	国立オリンピック記念青少年総合センター(東京)
39	1967(昭42)	10月	9～11日	神戸大学教養部					

2005年～2006年度役員・評議員

会 長 石 和 貞 男

〒187-0022

東京都小平市上水本町1-14-11

Tel. 042-323-6720; fax 042-323-6720; s-ishiwa@gf77.so-net.ne.jp

評 議 員

(全国区)

郷 通子 お茶の水女子大学 学長
 〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
 Tel. 03-5978-5100; fax 03-5978-5890; gakucho@cc.ocha.ac.jp

五條堀 孝 国立遺伝学研究所 生命情報・DDBJ 研究センター
 〒411-8540 静岡県三島市谷田1111
 Tel. 055-981-6847; fax 055-981-6848; tgjobor@genes.nig.ac.jp

河野 重行 東京大学大学院新領域創成科学研究科
 〒277-8562 千葉県柏市柏の葉5-1-5新領域生命棟601
 Tel. 04-7136-3673; fax 04-7136-3674; kawano@k.u-tokyo.ac.jp

米田 好文 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
 Tel. 03-5841-4454; fax 03-5841-4454; komeda-y@biol.s.u-tokyo.ac.jp

真木 寿治 奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科
 〒630-0101 生駒市高山町8916-5
 Tel. 0743-72-5490; fax 0743-72-5499; maki@bs.naist.jp

松田 洋一 北海道大学 先端科学技術共同研究センター
 〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
 Tel. 011-706-2619; fax 011-736-6304; yomatsu@ees.hokudai.ac.jp

岡田 典弘 東京工業大学生命理工学研究科
 〒226-8501 神奈川県横浜市長津田町4259
 Tel. 045-924-5742; fax 045-924-5835; nokada@bio.titech.ac.jp

颯田 葉子 総合研究大学院大学
 〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町湘南国際村
 Tel. 046-858-1574; fax 046-858-1544; satta@soken.ac.jp

東江 昭夫 東京大学大学院理学研究科
 〒113-0033 文京区本郷7-3-1
 Tel. 03-5841-4465; fax 03-5841-4465; toh-e@biol.s.u-tokyo.ac.jp

山本 和生 東北大学大学院生命科学研究所分子生命科学専攻
 〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
 Tel. 022-217-5054; fax 022-217-5053; yamamoto@mail.tains.tohoku.ac.jp

(北海道地区)

佐野 芳雄 北海道大学大学院農学研究科
 〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目
 Tel. 011-706-2443; fax 011-706-4934; rysano@abs.agr.hokudai.ac.jp

鈴木 仁 北海道大学大学院地球環境科学研究科
 〒060-0810 札幌市北区北10条西5丁目
 Tel. 011-706-2279; fax 011-706-2279; htsuzuki@ees.hokudai.ac.jp

(東北地区)

木島 明博 東北大学大学院農学研究科附属複合生態フィールド教育研究センター
 〒986-2242 宮城県牡鹿郡女川町小乗浜向 15
 Tel. 0225-53-2436; fax 0225-53-5303; a-kiijima@mail.tains.tohoku.ac.jp

山本 博章 東北大学大学院生命科学研究所
 〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉
 Tel. 022-217-6692; fax 022-217-6692; hyamamoto@mail.tains.tohoku.ac.jp

(関東地区)

定家 義人 埼玉大学理学部分子生物学科
 〒338-8570 さいたま市桜区下大久保255
 Tel. 048-858-3399; fax 048-858-3384; ysadaie@molbiol.saitama-u.ac.jp

篠崎 一雄 理化学研究所・植物分子生物学研究室
 〒305-0074 茨城県つくば市高野台3-1-1
 Tel. 029-836-4359; fax 029-836-9060; sinozaki@rtc.riken.go.jp

(東京地区)

小林 一三 東京大学大学院新領域創成科学研究科・メディカルゲノム専攻及び医科学研究所
 〒108-8639 東京都港区白金台4-6-1 東京大学医科学研究所1号館2階
 Tel. 03-5449-5326; fax 03-5449-5422; ikobaya@ims.u-tokyo.ac.jp

松浦 悦子 お茶の水女子大学理学部生物学教室
 〒112-8610 文京区大塚2-1-1
 Tel. 03-5978-5377; fax 03-5978-5373; etmatsu@cc.ocha.ac.jp

(中部地区)

広海 健 国立遺伝学研究所
 〒411-8540 三島市谷田1111
 Tel. 055-981-6767; fax 055-981-6868; yhiromi@lab.nig.ac.jp

能登原盛弘 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科
 〒467-8501 名古屋市長徳区瑞穂町字山の畑1
 Tel. 052-872-5820; fax 052-872-5820; noto@nsc.nagoya-cu.ac.jp

(関西地区)

宮下 直彦 京都大学農学研究科
 〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
 Tel. 075-753-6138; fax 075-753-6486; arabis@kais.kyoto-u.ac.jp

下田 親 大阪市立大学大学院理学研究科(生物地球系専攻)
 〒558-5855 大阪市住吉区杉本3-3-138
 Tel. 06-6605-2576; fax 06-6605-3158; shimoda@sci.osaka-cu.ac.jp

(中国・四国地区)

近藤 勝彦 広島大学大学院理学研究科 附属植物遺伝子保管実験施設
 〒739-8526 東広島市鏡山1-4-3
 Tel. 082-424-7490; fax 082-424-0738; kkondo@hiroshima-u.ac.jp

村田 稔 岡山大学資源生物科学研究所
 〒710-0046 倉敷市中央2-20-1
 Tel. 086-434-1205; fax 086-434-1205; mmura@rib.okayama-u.ac.jp

(九州地区)

中別府雄作 九州大学 生体防御医学研究所
 〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1
 Tel. 092-642-6800; fax 092-642-6791; yusaku@bioreg.kyushu-u.ac.jp

矢原 徹一 九州大学大学院理学研究院
 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
 Tel. 092-642-2622; fax 092-642-2622; tyahascb@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

幹事・役員

(国内庶務幹事)

田嶋 文生 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
 Tel. 03-5841-4051; fax 03-3818-5399; ftajima@biol.s.u-tokyo.ac.jp

(渉外庶務幹事)

福井 希一 大阪大学大学院工学研究科生命先端工学専攻
 〒565-0874 吹田市山田丘2-1
 Tel. 06-6879-7440; fax 06-6879-7441; kfukui@bio.eng.osaka-u.ac.jp

(会計幹事)

斎藤 成也 国立遺伝学研究所
 〒411-8540 静岡県三島市谷田1111
 Tel. 055-981-6790; fax 055-981-6789; nsaitou@genes.nig.ac.jp

(編集幹事)

遠藤 隆 京都大学農学研究科
 〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
 Tel. 075-753-6137; fax 075-753-6486; ggssiden@kais.kyoto-u.ac.jp(編集用)

(企画集会幹事)

城石 俊彦 国立遺伝学研究所系統生物研究センター哺乳動物遺伝研究室
 〒411-8540 静岡県三島市谷田1111
 Tel. 055-981-6818; fax 055-981-6817; tshirois@lab.nig.ac.jp

(将来計画幹事)

高畑 尚之 総合研究大学院大学
 〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町湘南国際村
 Tel. 0468-58-1502; fax 0468-58-1542; takahata@soken.ac.jp

(特別幹事)

品川日出夫 大阪大学微生物病研究所
 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘3-1
 Tel. 06-6879-8317; fax 06-6879-8320; shinagaw@biken.osaka-u.ac.jp

(第77回大会委員長)

五條堀 孝 国立遺伝学研究所 生命情報・DDBJ 研究センター
 〒411-8540 静岡県三島市谷田1111
 Tel. 055-981-6847; fax 055-981-6848; tgjobor@genes.nig.ac.jp

日本遺伝学会会則

- 第1条 本会は日本遺伝学会と称する。
- 第2条 本会は遺伝に関する研究を奨め、その知識の普及を計ることを目的とする。
- 第3条 本会は事務所を静岡県三島市谷田、国立遺伝学研究所内におく。
- 第4条 本会に入会しようとするものは住所、氏名および職業を明記して本会事務所に申し込むこと。
- 第5条 本会会員は普通会員、機関会員、賛助会員および名誉会員とする。毎年普通会員は会費10,000円（ただし在学証明書またはそれに代わるものを提出したときは6,000円）を、機関会員は15,000円を、賛助会員は1口（20,000円）以上を前納すること。会員で会費滞納1年におよぶものは資格を失うものとする。
- 第6条 本会は次の者を総会の決議により名誉会員とすることができる。
本会に功労のあった者、外国の卓越した遺伝学者。
- 第7条 本会は隔月1回遺伝学雑誌を発行して会員に配布する。
- 第8条 本会は毎年1回大会を開く。大会は総会と講演会とに分け、総会では会務の報告、規則の改正、役員選挙および他の議事を行い講演会では普通会員および名誉会員の研究発表をする。
大会に関する世話は大会委員若干名によって行い、大会委員長は会長が委嘱する。大会は臨時に開くことがある。
- 第9条 本会は各地に談話会をおくことができる。
- 第10条 本会は会長1名、幹事若干名、会計監査2名の役員、および評議員若干名をおく。
1) 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
2) 会長は、評議員が全普通会員の中から選出した複数の候補者から普通会員による直接選挙によって選出される。
3) 評議員は、普通会員による直接選挙で選出される。
4) 幹事は、会長が推薦する候補会員を評議員の過半数が承認することにより選任される。
5) 会計監査は、会長が推薦する候補会員を評議員の過半数が承認することにより選任される。
6) 会長は評議員会を招集し、その議長を務める。幹事は評議員会に出席するものとする。
7) 評議員会は、会員を代表して、事業計画、経費の収支、予算・決算、学会誌の発行、大会の開催、その他重要事項について審議し、出席評議員の過半数をもって議決する。
8) 会長ならびに幹事により幹事会を構成し、会長がこれを代表する。
9) 幹事会は、学会の関連事項を論議し評議員会に諮ると共に、会務を執行する。
10) 会計監査は、学会の会計を監査する。
- 第11条 役員および評議員の任期は2カ年とする。会長および評議員は連続三選はできない。
- 第12条 本会の事務年度は暦年による。
- 付則 平成7年10月13日に第5条を改正し、平成8年1月1日から施行する。

本誌の発行に関しては平成17年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）をうけているので、ここに付記する。

Genes & Genetic Systems 第80巻2号（付録）
2005年4月25日発行 頒価3,000円（本誌とも）
発行者 石和 貞男・品川日出夫
印刷所 レタープレス株式会社
Letterpress Co., Ltd. Japan
〒739-1752 広島市安佐北区上深川町809-5番地
電話 082 (844) 7500
FAX 082 (844) 7800

発行所 日本遺伝学会
Genetics Society of Japan
静岡県三島市谷田1111
国立遺伝学研究所内

学会事務取扱
〒411-8540 静岡県三島市谷田・国立遺伝学研究所内

日本遺伝学会
(電話・FAX 055-981-6736)
(振替口座・00110-7-183404)
加入者名・日本遺伝学会

国内庶務、渉外庶務、会計、企画・集会、将来計画、編集などに関する事務上のお問い合わせは、各担当幹事あてご連絡下さい。

乱丁、落丁はお取替えます。